

信州大学教育学部・教育学研究科に
おける学生の満足度調査報告書
(2022年度～2024年度)

信州大学教育学部自己点検・評価委員会
2026年（令和8年）2月

はじめに

本学部では卒業生に対する満足度調査を2004年度から実施し、3年毎にまとめの報告書を作成してきました。本報告書はその7回目となります。また、本大学院教育学研究科においても、今回はじめて報告書を作成いたしました。本調査に協力してくださった多くの学生の皆さんに感謝するとともに、本報告書の作成にご協力いただいた多くの教職員の皆さまに心から御礼申し上げます。

満足度調査は、本学部と本研究科に在籍している卒業・修了間際の学生の「教育・研究体制に対する考え」「カリキュラムや授業の満足度」「大学での学習と生活」等についての実態を把握し、今後の本学部と本研究科の教育改善のための情報を得ることを目的としており、「計画 (Plan)」「実行 (Do)」「評価 (Check)」「改善 (Action)」という、いわゆるPDCAサイクルの一環として長期間にわたって実施してきました。この調査で明らかになった本学部と本研究科が抱える課題は、学内で共有し、その都度解決を図っています。同時に、本調査で明らかにした情報は、長期的な視野から本学部と本研究科の方向性と戦略を立てる上での貴重な情報にもなっています。

従来からも指摘されていることですが、PDCAサイクルの「C」に相当する満足度調査から得られた結果を「可視化」して発信することが大切であり、その上で、「可視化」して発信した結果を、いかに具体的な「A」、すなわち「改善」へと結びつけ、有効に活用するかが課題となります。今回の2022～2024年度に実施した満足度調査においても、本学部の卒業生の4年間を通じた成長と学部の課題、本研究科の修了生の2年間を通じた成長と大学院の課題を浮かび上がらせてくれました。本学部と本研究科では、この結果を真摯に受け止め、今後の学部生と大学院生の皆さんのより良い学びの環境づくりに努めていきたいと思っております。ご協力いただきありがとうございました。

2026年2月 信州大学教育学部自己点検・評価委員会委員長
篠崎 正典

信州大学教育学部・教育学研究科における学生の満足度調査 報告書 目次

はじめに

(自己点検・評価委員長 篠崎 正典)

【第1部：教育学部】	1
1. 調査概要	2
(1) 調査目的	2
(2) 調査内容	2
(3) 調査対象	3
(4) 調査方法	3
(5) 回収結果	3
2. 調査結果の要約	4
3. 過去3年間の年度別調査の分析	7
(1) 教育学部が目指す教育研究の実現度合	7
(2) 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度	10
(3) 授業科目やカリキュラムの満足度	13
(4) 学生支援や施設・設備環境の満足度	20
(5) 学生自身の学習・生活について	23
(6) 共通教育について	26
【第2部：教育学研究科】	29
1. 調査概要	30
(1) 調査目的	30
(2) 調査内容	30
(3) 調査対象	31
(4) 調査方法	31
(5) 回収結果	31
2. 調査結果の要約	32
3. 過去3年間の年度別調査の分析	35
(1) 教育学研究科が目指す教育研究の実現度合	37
(2) 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度	40

(3) 高度教職実践専攻（教職大学院）の特色や授業科目等に対する満足度	44
(4) 面接練習、各種相談への満足度	49
(5) 教職大学院への進学を推奨する意思の有無	53

【第 1 部：教育学部】

1. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は信州大学教育学部に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学部のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、学部改革の指針に活かすことを目的とする。

本学部はこれまで長野県における唯一の国立大学法人の教員養成系学部として、長野県を中心とした教育界に多くの卒業生を輩出してきた。卒業生の教員就職率は全国でも比較的高い数値を維持しているとはいえ、社会・経済状況の急速な変化を背景として、学校教育における教員の教育問題への対応能力が問われている。現状に即応した教育・研究体制の再構築が求められる。

本調査では、教育学部における専門的教育や研究を学生がどのように受け止めているかを把握し、調査結果を生かした教育・研究を探るものである。

(2) 調査内容

本調査では「4年生用」の調査票を作成し、調査を実施した。教育学部での学習の成果や課題をより明確に把握することを目的に、2023年度調査より調査項目を改定した。調査票の質問項目は、以下に示すとおりである。

【2022年度】

①回答者の属性: 1項目

入学年度

②教育学部の教育研究についての考え: 3項目

本学部が目指している「臨床の知」「附属学校園の活用」「地域社会との連携」に即し教育が行われているかを尋ねた。

③講義等の満足度: 17項目、自由記述

「1年次の講義科目」「講義・演習科目」「臨床経験科目」「授業のあり方・その他」に区分して、満足度を尋ねた。さらに「やや不満足」「不満足」の内容と改善点について自由記述で尋ねた。

④大学での学習と生活: 3項目

系統的な授業の履修、学ぶ意義（講義内容と日常生活経験や社会情勢、教育実習など実践的経験と関連させて学べたか）の状況を尋ねた。

⑤共通教育: 5項目

共通教育についての満足度の状況を尋ねた。

⑥教育学部の教育の充実: 8項目、1項目（自由記述）

単位取得制度、現場での実践的経験、自然教育や環境教育の科目、ガイダンスやシラバスの改善、現在のカリキュラムの改善点、資質・能力の自己評価などの重要性を尋ねた。

⑦教育学部の問題点・改善点: 1項目（自由記述）

「教育学部の施設・設備」「教育学部の教員や事務職員の対応」「所属専攻や分野の組織や指導体制」の3項目について、自由記述で尋ねた。

⑧教育学部に言いたいこと、主張したいこと: 1項目（自由記述）

本調査票に欠けている視点や意見、教育学部のあるべき姿などについて、自由記述で尋ねた。

【2023、2024年度】

①教育学部の教育研究についての考え: 3項目

本学部が目指している「臨床の知」「附属学校園の活用」「地域社会との連携」に即し教育が行われているかを尋ねた。

②教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度：4項目

本学部の学位授与の方針4点それぞれについて、卒業時点でどの程度達成されているかを尋ねた。

③講義等の満足度：15項目、自由記述

「授業科目やカリキュラム（臨床経験科目を除く）」「授業科目やカリキュラム（臨床経験科目）」「臨床経験科目」「授業の進め方など」に区分して、満足度を尋ねた。さらに「やや不満足」「不満足」の内容と改善点について自由記述で尋ねた。

④学生支援や施設・設備環境の満足度：6項目

就職・進学支援、健康な学生生活を送るための情報や支援、図書館のサービス、講義室・実験室の施設・設備、ICT環境（Wi-Fi等）の設備、自習場所について選択式で満足度を尋ねた。

⑤大学での学習と生活：4項目

系統的な授業の履修、学ぶ意義（講義内容と日常生活経験や社会情勢、教育実習など実践的経験と関連させて学べたか、3年次で教育実践を経験したこと）の状況を尋ねた。

⑥共通教育：4項目

共通教育についての満足度の状況を尋ねた。

⑦教育学部の問題点・改善点：1項目（自由記述）

「授業科目やカリキュラム」「学生支援（学生生活・健康・就職・進学・留学等）や学生相談」「教育学部の施設（建物、図書、寮、自習室など）・施設（教材・ICT環境、Wi-Fi環境など）」「所属コースの組織や指導体制」「教育学部の教員や事務職員の対応」の5項目について、自由記述で尋ねた。

⑧教育学部に言いたいこと、主張したいこと：1項目（自由記述）

本調査票に欠けている視点や意見、教育学部のあるべき姿などについて、自由記述で尋ねた。

(3) 調査対象

本調査の対象者は信州大学教育学部に在籍する4年生である。調査対象者数は次のとおりである。

2022年度に4年生である者	246名
2023年度に4年生である者	238名
2024年度に4年生である者	223名

(4) 調査方法

調査は学部の自己点検・評価委員会が主体となり、調査目的に即した調査項目を作成した。

調査期間と配布方法については、集計の簡便さを考慮し、2022年度からはeALPSを活用し、締め切り期限を延長するとともに未回答者に対してリマインドメールを送信して回答促進を図った。2023年度からは、「教職実践演習」最終回における回答時間の確保およびeALPSでの回答依頼、未回答者に対してはリマインドメールを送信した。

その成果の一端として、回収率が徐々に回復し、2023、2024年度は90%台を維持している。

(5) 回収結果

年度別の有効数と回答率は次のとおりである。

	対象者数 (人)	回答数 (人)	回答率 (%)
2022年度	246	188	76.4
2023年度	238	227	95.4
2024年度	223	206	92.4

2. 調査結果の要約

2004年度から信州大学教育学部に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学部のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、学部改革の指針に活かすことを目的として本調査を実施してきた。2007年度、2010年度、2013年度、2016年度、2019年度、2022年度の報告に続き、今回は7回目の報告となる。今回の調査結果の要約は以下のとおりである。

(1) 教育学部の教育研究についての考え

「臨床の知」の理念に基づいた授業科目の「十分あった」と「まあまああった」の合計解答は、2022年度91.5%、2023年度92.5%、2024年度97.1%であり、平均で93.7%と高い値を示した。また「附属学校園の活用」に即した授業科目の「十分あった」と「まあまああった」の合計解答は、2022年度92.5%、2023年度92.1%、2024年度97.1%であり、平均93.9%と高い数値である。このように、授業科目の編成については受け入れられていると言える。「地域社会との連携」については、その目的に即した授業科目が「十分あった」と「まあまああった」の合計回答は、2022年度54.8%、2023年度74.0%、2024年度82.5%で大きく向上している。

(2) 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度

「学校教員をはじめとする教育の専門家として、以下の知識と能力を充分培った学生に『学士（教育学）』の学位を授与することとしています。現時点での各資質・能力について、5段階で自己評価してください。」という質問項目を2023年度以降は次の4項目に変更した。「A. 教育の専門家に求められる深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観」については、2023年度には92.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2024年度には95.2%と高満足であった。「B. 教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能」については、2023年度には92.5%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2024年度には96.1%と高満足であった。「C. 他者と協働して教育活動をつくる社会的スキル」についても、2023年度には90.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2024年度には92.7%と高満足。「D. 理論と実践を往還する省察と改善の態度」については、2023年度には92.5%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2024年度には94.7%と高満足であった。

(3) 授業科目やカリキュラムの満足度

①「授業科目やカリキュラム（臨床経験科目を除く）」、②「授業科目やカリキュラム（臨床経験科目）」、③「授業の進め方など」の3つにおいて次の傾向が見られる。

①「授業科目やカリキュラム（臨床経験科目を除く）」

「A. 共通教育科目の内容」については、2022年度は95.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2023年度は89.0%、2024年度は95.2%と高い満足度を維持している。「B. 1年次に受講可能な専門科目の数」については、2022年度は85.6%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2023年度は83.7%、2024年度は85.0%であり、前回の調査での数値より高い値を示しており、高い満足度が伺える。「D. 所属コースの専門科目の内容（※～2022 所属分野における専門科目）」については、2022年度は94.2%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2023年度は92.9%、2024年度は95.6%と増加傾向にあり、90%を超える高い満足度を維持している。「E. 卒業研究の指導（～2022 所属分野における研究指導）」については、2022年度は91.5%、2023年度は89.4%、2024年度は95.6%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答し、9割を超える高い満足度を維持している。

②「授業科目やカリキュラム（臨床経験科目）」

「G. 教育臨床演習」では、2023年度は満足（「十分満足」「やや満足」）が82.3%、2024年度は89.8%である。「H. 教育実習」は、受講者の評価が圧倒的に高い。2022年度は満足（「十分満足」「やや満足」）が97.8%、2023年度は95.6%、2024年度は97.1%と高い満足度を維持している。「J. 教職実践演習」も、2023年度は81.8%、2024年度は85.9%と高い満足度を維持している。

③「授業の進め方など」

「M. 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫」については、2022年度は84.0%、2023年度は78.4%、2024年度は88.3%と満足度が増加している。「O. 成績評価の方法」についても、2022年度は92.6%、2023年度は95.6%、2024年度は93.7%が満足と回答している。前回の調査結果を大きく上回る高い満足度の値を示した。

(4) 学生支援、設備・施設環境の満足度

「A. 就職や進学のための支援や指導」については、2022年度は77.1%、2023年度は72.3%、2024年度は80.1%が満足としている。前回の調査結果を大きく上回る高い満足度の値を示した。「不満足」の割合も前回の調査結果に比べて減少し、3年間の改善の成果が認められる。

(5) 学生自身の学習・生活について

「自身の将来を見通し、系統的な履修ができた」については、2022～2024年度にかけて87.2%、90.4%、96.1%と順調に伸びている。また、「日常生活経験や社会情勢などと講義の内容を関連させつつ学んだ」でも、2023年度は2022年度の89.3%から81.9%に減少したが、2024年度は91.7%と増加傾向にある。このほか、「教育実習などの実践的経験と講義内容を相互に関連させつつ学べた」で肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が2024年度には91.7%に達した。

(6) 共通教育について

「A. 共通教育を通して、他者と協働して主体的に学ぶきっかけが得られましたか？」については、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的な回答が、2022年度は76.1%、2023年度は65.2%、2024年度は84.5%である。「C. 共通教育を通して、大学における学習の基礎となる知識・技能を得ることができましたか」（※～2022「共通教育を通して、専門教育につながる基礎力がついた」）については、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的な回答が2022年度は71.8%、2023年度は66.9%、2024年度は80.1%で徐々に増加傾向にある。一方、「“こんな授業があったら受講してみたかった”と思う授業内容」についての自由記述では、ICT機器の使い方やプログラミング、論文やレポートの書き方、現職の教師や様々な業種の方の話を書く社会とのつながりを意識した授業などの授業の開講を求める意見があった。

(7) 自由記述での意見他

①授業科目やカリキュラム、②学生支援（学生生活・健康・就職・進学・留学等）や学生相談、③教育学部の施設（建物、図書、寮、自習室など）、設備（機材、ICT環境、Wi-Fi環境など）、④所属コースの組織や指導体制、⑤教育学部の教員や事務職員の対応、⑥フリートーカーについて意見を求めた。

①については、多様で魅力的な授業科目の充実により、専門的知識の獲得や学習意欲の向上につながったという肯定的な意見がみられたが、理論と実践の乖離が指摘されている。カリキュラム面では、副免許取得の際の履修の困難さや2年次の授業が過密であること、教育実習前に必要な授業が実習後に配置されているといった指摘もみられた。1年次の専門科目に対する要望や2年次以降の時間割の過密さは、以前から指摘されている。専門科目の1年次開講や教育実習との連動性を考慮した4年間のカリキュラムの見直しを引き続き検討するべきであろう。また、臨床経験科目においては、附属学校園や実習先となる公立校とのより綿密な情報交換が求められる。教員採用試験対策不足や、就職支援不足を指摘する学生の記載は、前回同様多く見受けられた。教員採用試験対策については、学部体制による模擬面接実施の他にも様々なセミナーを開催し、充実を図ってきているが、学生のニーズを踏まえて今後の取り組みを見極める必要がある。

②については、学生生活・健康面の充実に向けた教員の対応や保健室からの情報提供に対する肯定的な記述がみられた。また、就職・進学・留学に関しては、特に、教員採用試験対策における手厚い支援に対する評価が目立った。加えて、学生相談に関しては、気軽に相談できる環境が整っており、支援も親身な対応が行われていることが評価されている。

一方、学生生活・健康面では、駐車場利用に関する経済的な負担や、支援の活動内容が見えづらといった情報発信不足、就職・進学・留学支援では、高校教員・他県教員採用試験に関する情報不足や教員志望以外の進路希望者への支援不足といった課題点が指摘されている。

③については、施設面において、建物や校舎は清潔で利用しやすく、寮についても比較的安価で学生生活の経済的負担の軽減に寄与しているとの評価を得た。また、学習環境としての図書館や自習室が果たす役割、ICT機器やWi-Fi環境等の利便性に対しても一定の評価があった。

一方、建物（音楽練習棟、泉会館、サークル棟）の老朽化や建物間の設備格差、図書館の閉館時間や資料不足の問題、寮におけるエアコン設置や長期休業期間中の清掃・ごみ処理の問題が課題として挙げられている。加えて、学内の駐車場や飲食場所の不足、自動販売機の設置場所の偏り、生協での夜間の食事提供など、学生生活全般に関わる利便性の課題も指摘された。施設・設備は、学生の学修・生活を支える重要な役割を果たすものである。建物の老朽化や設備格差に加えて安定したWi-Fi環境の構築など、学生の快適性や利便性の向上に対応するための予算確保といった中・長期的な検討が必要である。また、学生が使用できる駐車場や生協の夜間営業などは、関係各所との相談の上、よりよい施設運用を目指す必要があるだろう。

④については、所属コースでの教員の手厚く真摯な指導や研究室という垣根を超えた充実した指導体制を評価する記述がみられた。また、教員の研究内容や教員同士の人間関係に対しても一定の評価を得ている。一方で、研究室や指導教員によって指導・支援の手厚さに差がある点、教員数が減少していることで満足な指導が受けられないという点に不満を感じているようである。さらに、教員間の連携や調整がうまくいかず、学生への情報周知が遅れるという不便も生じている。所属するコースや研究室が異なっても、安定した学習環境を提供できる組織や指導体制の構築が求められる。

⑤については、教員や事務職員による対応は、迅速かつ丁寧であり、また気軽に質問ができる雰囲気構築されているといった評価がみられ、これらが学生にとっての大きな安心材料となっていることが窺える。一方で、教員や事務職員の対応にはばらつきがあり、中には相談しづらいと感じたケースもあったようである。また、事務窓口の対応時間の短さや担当者が分かりにくいことによって、学生が戸惑うケースもみられた。窓口の対応時間など、改善が難しい点もあるが、担当者が異なっても一貫した情報提供がなされるなど、情報伝達や対応体制の面での改善が求められる。

⑥については、教育学部のあるべき姿として、少子高齢化に伴う受験者数の減少傾向に対して海外からの学生を積極的に受け入れる体制整備を望む声がみられた。また、「足並みを揃える」意識が強いあまり、学生の自由さが損なわれているといった指摘もあった。受験者数の減少は学部全体が取り組んでいく課題であるが、学生の主体性を大事にした教育を各教員が心がけていくことが重要である。

臨床経験科目に関連して、教育実習における移動費・昼食費の費用軽減、実習中の拘束時間やICT活用にかかわる負担軽減を望む声がみられた。なお、母校実習の導入といった公立学校の様子を知りたいという要望は、他の臨床経験科目を対象とした記述においても確認できる。教育実習における各種の負担軽減は、ここ数年で担当授業時数削減を図ってきたが、引き続き検討する必要がある。また、公立学校と多くの接点を持てるよう、臨床経験科目全体を工夫していく必要がある。

授業内容や授業形態について、教育学部の授業内容は古い理論が中心で実用性に乏しく、新しい教育内容・方法や発達障害等の現代的な教育課題に関する内容が不足しているといった意見、授業形態については、対面とオンラインを選択できるようなシステムを望む意見がみられた。各教員が専門的知識の刷新やオンラインを併用した柔軟な授業方法を模索していく必要がある。

学生生活全般においては、上級生と下級生の積極的な交流の機会、学部内の敷地の有効活用、子どもや地域とのかかわりを望む声がみられた。また、学生の主体的な意見を反映させる場や機会がないことに対する不満もみられた。学生が学内外を問わず豊かな人間関係を築けるような支援、学生の意見を反映させた組織運営を充実させていく必要がある。

最後に、本調査に協力いただいた学生の皆さんに感謝し、調査結果の要約とする。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

(1) 教育学部が目指す教育研究の実現度合

■年度別比較グラフ (2022～2024年度) (単位はすべて%)

Q1 教育学部の教育研究についていかがいます。

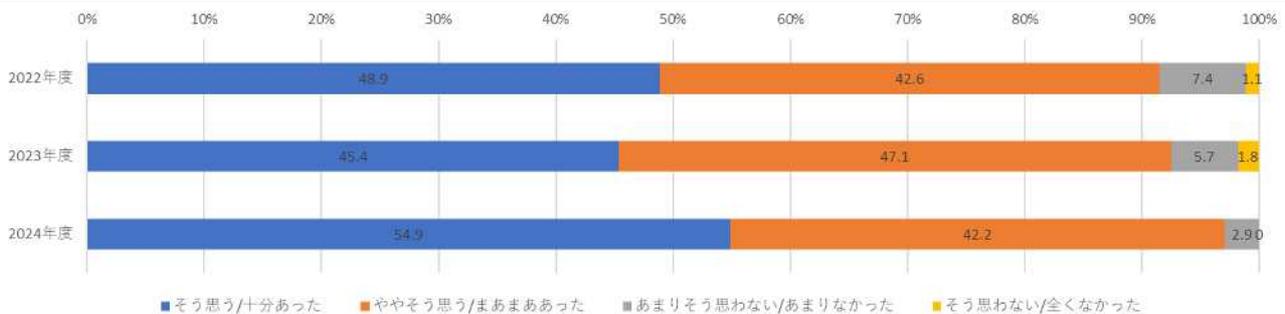
信州大学教育学部では、教員養成の伝統と実績を踏まえ、「臨床の知」の理念のもとに、次の目標を掲げて教育研究を行なっています。

1. 高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者を育成します。
2. 附属学校園を積極的に活用し、新たなカリキュラムや教材の開発、指導法の工夫など教育現場に役立つ教育研究を推進します。
3. 教育委員会や地域の諸学校と連携し、不登校や学力問題など多様な教育課題に対応し、専門的な支援を行います。
4. 地域社会の要請に応えるため、生涯教育、リフレッシュ教育、現職教育等を充実させ、開かれた教育・研究体制を構築します。

現在の信州大学教育学部は、これらの目標の達成に向けた教育研究を行っていると思いますか (4.を除く)。※2023年度から設問および選択肢を変更

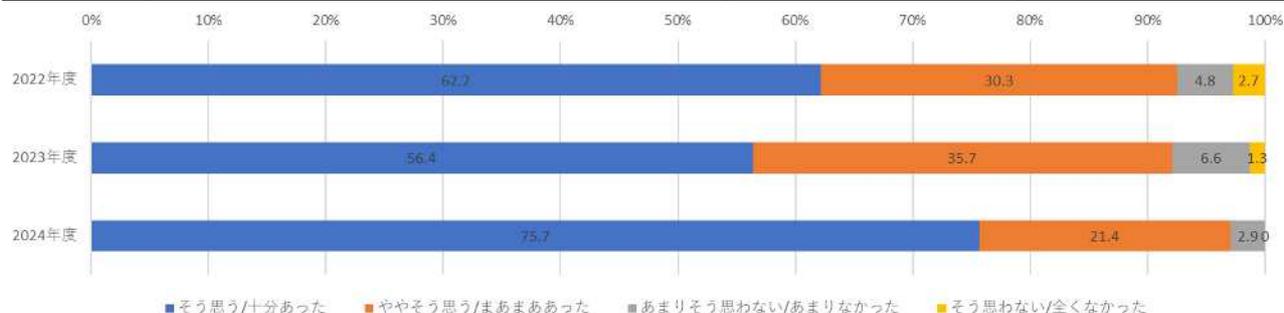
1. 高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者を育成している

	そう思う/十分あった	ややそう思う/まあまああった	あまりそう思わない/あまりなかった	そう思わない/全くなかった
2022年度	48.9	42.6	7.4	1.1
2023年度	45.4	47.1	5.7	1.8
2024年度	54.9	42.2	2.9	0.0



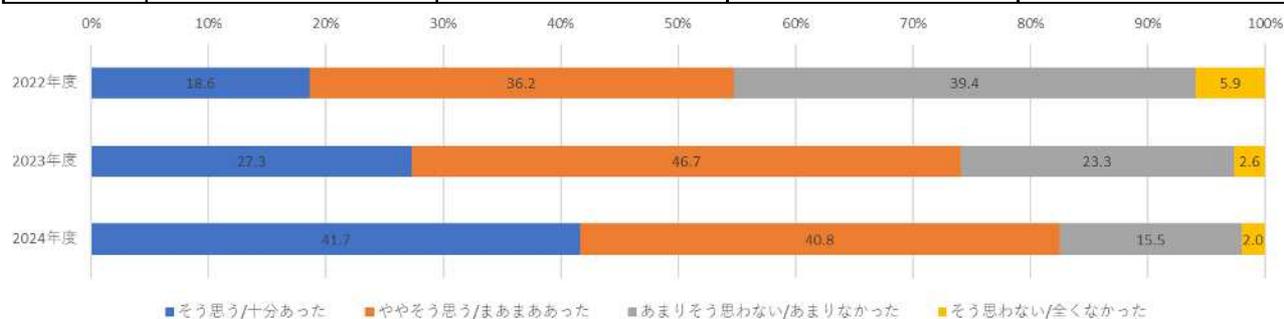
2. 附属学校園を積極的に活用し、新たなカリキュラムや教材の開発、指導法の工夫など教育現場に役立つ教育研究を推進している

	そう思う/十分あった	ややそう思う/まあまああった	あまりそう思わない/あまりなかった	そう思わない/全くなかった
2022年度	62.2	30.3	4.8	2.7
2023年度	56.4	35.7	6.6	1.3
2024年度	75.7	21.4	2.9	0.0



3. 教育委員会や地域の諸学校と連携し、不登校や学力問題など多様な教育課題に対応し、専門的な支援を行っている

	そう思う/十分あった	ややそう思う/まあまああった	あまりそう思わない/あまりなかった	そう思わない/全くなかった
2022年度	18.6	36.2	39.4	5.9
2023年度	27.3	46.7	23.3	2.6
2024年度	41.7	40.8	15.5	2.0



☆ 教育学部が目指す教育研究の実現度合の分析

注意：2023年度から設問形式が変更されている（「授業科目があったか」→「教育研究を行っていると思うか」）ため、厳密な比較は困難であるが、傾向を読み取ることは可能である。

「高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者育成」について、肯定的な回答（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、2022年度91.5%、2023年度92.5%、2024年度97.1%と、極めて高い水準を維持し、さらに向上している。特に2024年度は「そう思う」が54.9%に達すると同時に「そう思わない」という回答が0.0%となり、非常に高い満足度を示したといえる。

「附属学校園の活用」については、肯定的な回答が2022年度92.5%、2023年度92.1%、2024年度97.1%と、一貫して9割を超える高い評価を得ている。特に2024年度は「そう思う」が75.7%と突出して高く、附属学校園を活用した教育研究の充実が顕著に認識されていることがうかがえる。前回調

【第1部：教育学部】3. 過去3年間の年度別調査の分析

査時（2019～2021年度「十分あった」：平均48.9%）と比較しても、高い水準を維持している。

「地域社会との連携」については、肯定的な回答が2022年度54.8%、2023年度74.0%、2024年度82.5%と、顕著な改善傾向が見られる。2022年度は前回調査時（2019～2021年度平均60.2%）とほぼ同水準であったが、2023年度以降は大幅に向上している。これは、コロナ禍からの回復により、地域の教育機関等をフィールドとした教育研究活動が活発化したことが要因と考えられる。否定的な回答も2022年度45.3%から2024年度17.5%へと大きく減少しており、地域連携の取り組みが着実に成果を上げている。

(2) 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q2 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度について

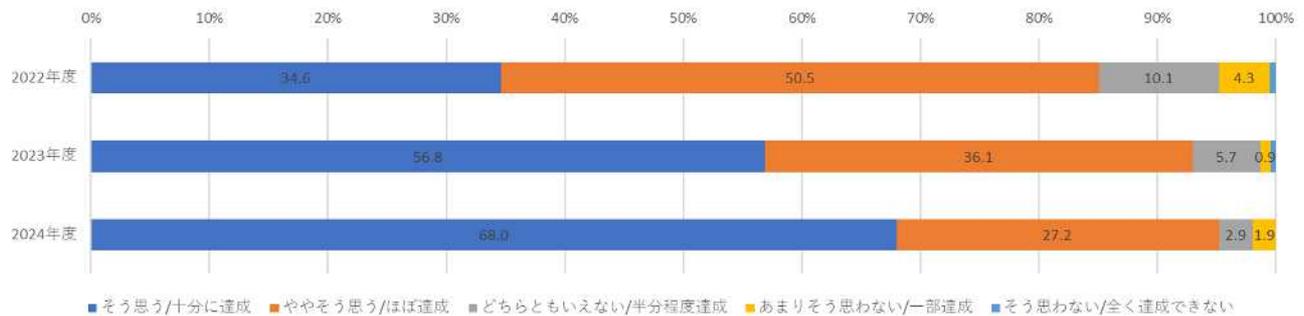
信州大学教育学部は、実践的な知の体系としての「臨床の知」の理念のもと、学校教員をはじめとする教育の専門家として、以下の知識と能力を充分培った学生に「学士（教育学）」の学位を授与することとしています。

- 教育の専門家に求められる深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観
- 教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能
- 他者と協働して教育活動をつくる社会的スキル
- 理論と実践を往還する省察と改善の態度

あなたは、教育学部で受けた教育により、以下の知識と能力を培い、身につけることができたと思いますか。 ※2023年度から設問および選択肢を変更

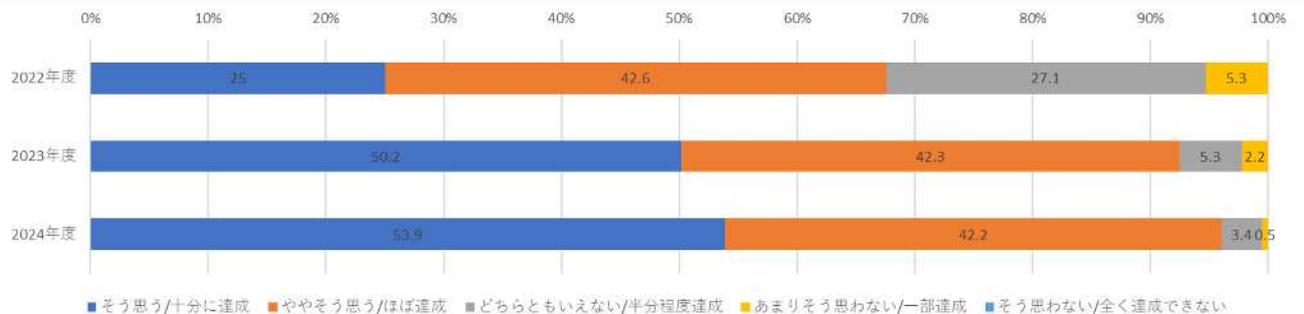
A. 教育の専門家に求められる深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観

	そう思う/十分に達成	ややそう思う/ほぼ達成	どちらともいえない/半分程度達成	あまりそう思わない/一部達成	そう思わない/全く達成できない
2022年度	34.6	50.5	10.1	4.3	0.5
2023年度	56.8	36.1	5.7	0.9	0.4
2024年度	68.0	27.2	2.9	1.9	0.0



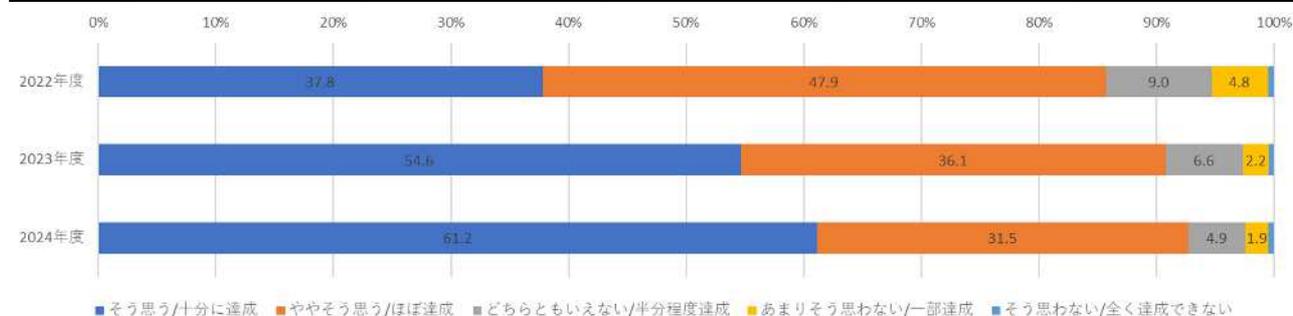
B. 教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能

	そう思う/十分に達成	ややそう思う/ほぼ達成	どちらともいえない/半分程度達成	あまりそう思わない/一部達成	そう思わない/全く達成できない
2022年度	25.0	42.6	27.1	5.3	0.0
2023年度	50.2	42.3	5.3	2.2	0.0
2024年度	53.9	42.2	3.4	0.5	0.0



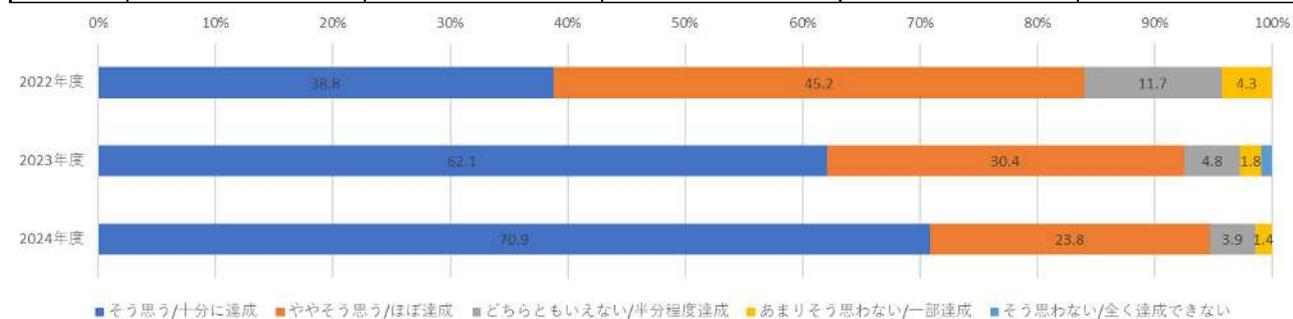
C. 他者と協働して教育活動をつくる社会的スキル

	そう思う/十分に達成	ややそう思う/ほぼ達成	どちらともいえない/半分程度達成	あまりそう思わない/一部達成	そう思わない/全く達成できない
2022年度	37.8	47.9	9.0	4.8	0.5
2023年度	54.6	36.1	6.6	2.2	0.4
2024年度	61.2	31.5	4.9	1.9	0.5



D. 理論と実践を往還する省察と改善の態度

	そう思う/十分に達成	ややそう思う/ほぼ達成	どちらともいえない/半分程度達成	あまりそう思わない/一部達成	そう思わない/全く達成できない
2022年度	38.8	45.2	11.7	4.3	0.0
2023年度	62.1	30.4	4.8	1.8	0.9
2024年度	70.9	23.8	3.9	1.4	0.0



☆ 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度の分析

注意：2023年度から設問形式と選択肢が変更されている（5段階評価から実質4段階評価へ、表現も変更）ため、厳密な数値比較は困難であるが、全体的な傾向は明確に読み取れる。

「A. 深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観」については、肯定的な回答（「そう思う」「ややそう思う」の合計）が2022年度85.1%から、2023年度92.9%、2024年度95.2%と顕著に向上している。特に「そう思う」の割合が2022年度34.6%から2024年度68.0%へと倍増しており、学生の自己評価が大幅に高まっている。

「B. 専門的知識・技能」については、肯定的な回答が2022年度67.6%から、2023年度92.5%、2024年度96.1%へと劇的に向上している。2022年度は「どちらともいえない/半分程度達成」が27.1%と高かったが、2023年度以降は5%以下に減少しており、専門教育の成果が学生に実感されていることが明確に示されている。

「C. 社会的スキル」については、肯定的な回答が2022年度85.7%、2023年度90.7%、2024年度92.7%と、一貫して高い水準を維持しながらさらに向上している。「そう思う」の割合も2022年度37.8%から2024年度61.2%へと着実に増加しており、協働的な学びの成果が現れている。

「D. 理論と実践を往還する省察と改善の態度」については、肯定的な回答が2022年度84.0%、2023

【第1部：教育学部】3. 過去3年間の年度別調査の分析

年度92.5%、2024年度94.7%と顕著に向上している。特に「そう思う」の割合が2022年度38.8%から2024年度70.9%へと大幅に増加しており、「臨床の知」の理念に基づく教育の成果が最も顕著に表れている項目といえる。

全体として、2023年度の設定変更以降、すべての項目で肯定的な回答が9割を超えており、ディプロマ・ポリシーに掲げる資質・能力が学生に着実に身につけていることが確認できる。特に2024年度は全項目で95%前後かそれ以上の肯定的評価を得ており、教育学部の教育目標が高いレベルで達成されていることを示している。

(3) 授業科目やカリキュラムの満足度

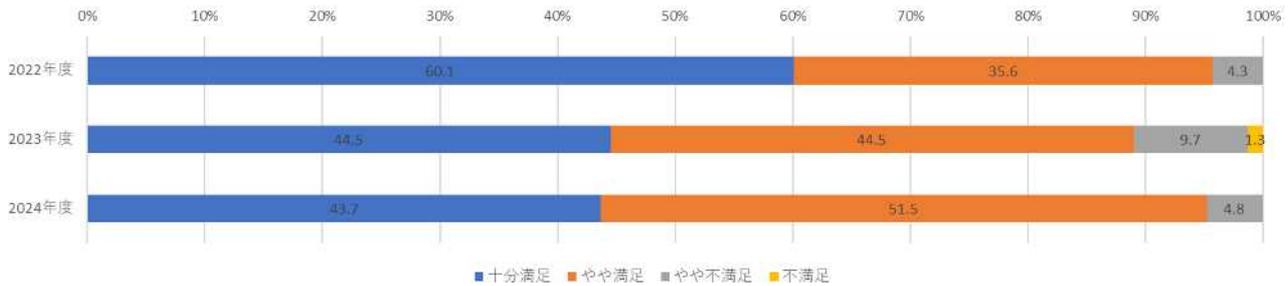
■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q3 次の項目について、あなたの満足度をおたずねします。

<授業科目やカリキュラム（臨床経験科目を除く）>

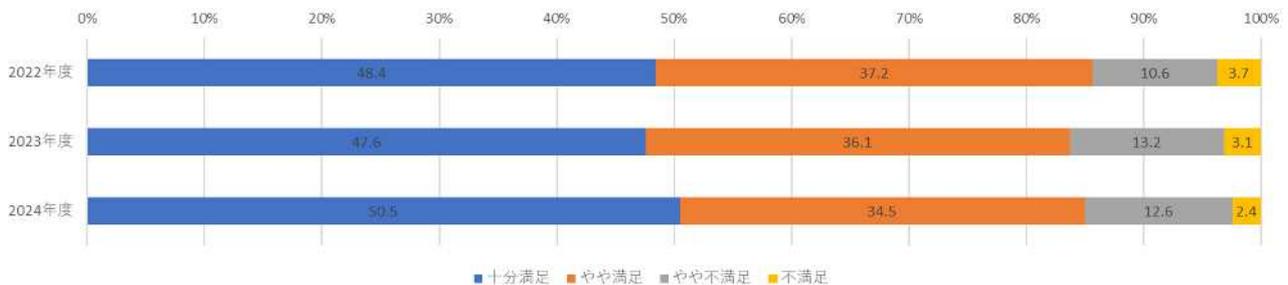
A. 共通教育科目の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	60.1	35.6	4.3	0.0
2023年度	44.5	44.5	9.7	1.3
2024年度	43.7	51.5	4.8	0.0



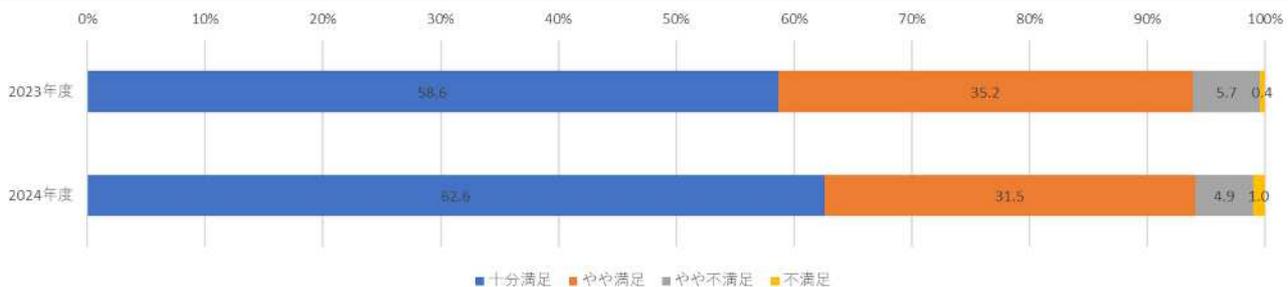
B. 1年次に受講可能な専門科目の数

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	48.4	37.2	10.6	3.7
2023年度	47.6	36.1	13.2	3.1
2024年度	50.5	34.5	12.6	2.4



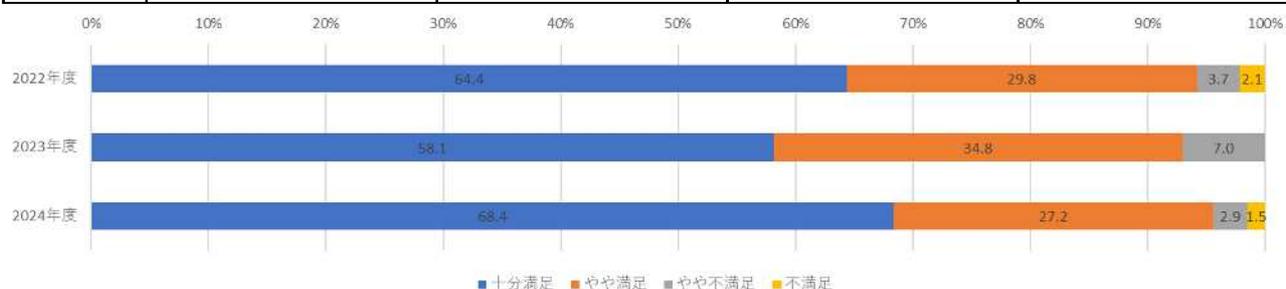
C. コース指定された必修の専門科目の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	58.6	35.2	5.7	0.4
2024年度	62.6	31.5	4.9	1.0



D. 所属コースの専門科目の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	64.4	29.8	3.7	2.1
2023年度	58.1	34.8	7.0	0.0
2024年度	68.4	27.2	2.9	1.5



E. 卒業研究の指導

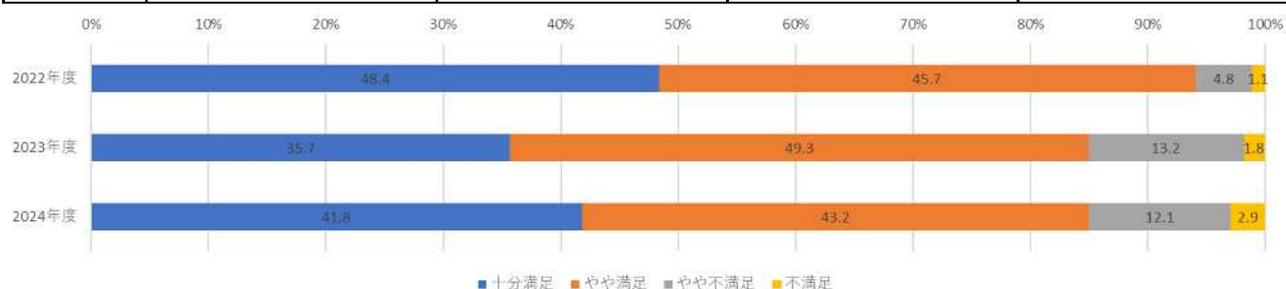
	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	70.2	21.3	4.3	4.3
2023年度	62.1	27.3	9.7	0.9
2024年度	76.7	18.9	3.9	0.5



<授業科目やカリキュラム（臨床経験科目）>

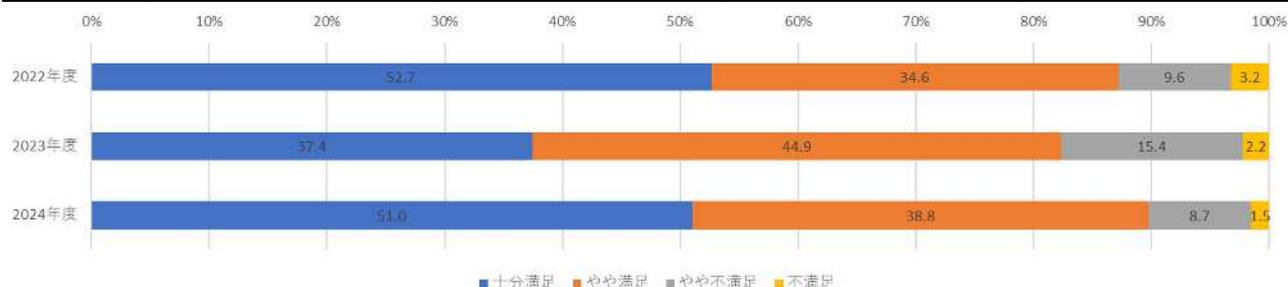
F. 教職・カリキュラム論（教育臨床入門）

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	48.4	45.7	4.8	1.1
2023年度	35.7	49.3	13.2	1.8
2024年度	41.8	43.2	12.1	2.9



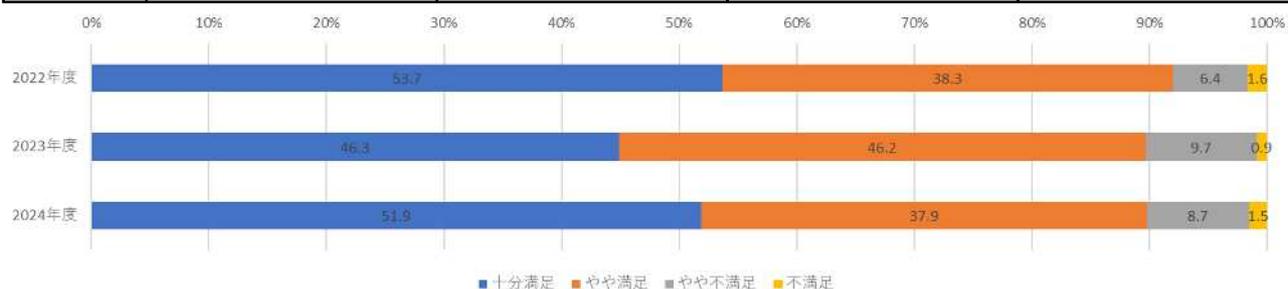
G. 教育臨床演習

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	52.7	34.6	9.6	3.2
2023年度	37.4	44.9	15.4	2.2
2024年度	51.0	38.8	8.7	1.5



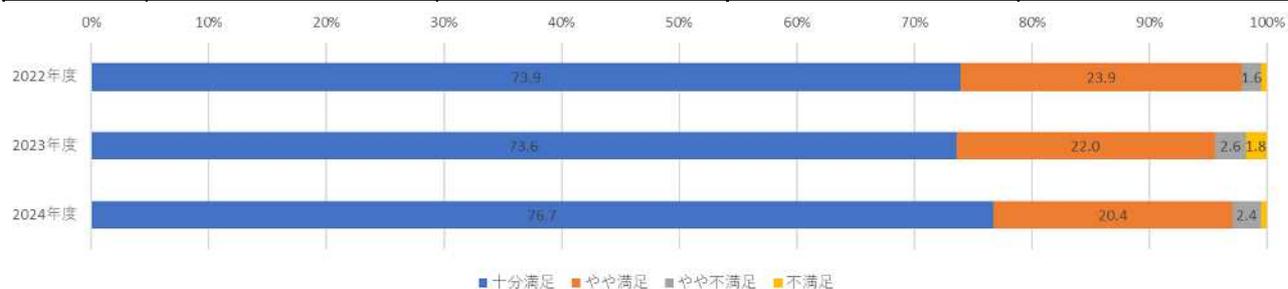
H. 教育実習 事前・事後指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	53.7	38.3	6.4	1.6
2023年度	46.3	46.2	9.7	0.9
2024年度	51.9	37.9	8.7	1.5



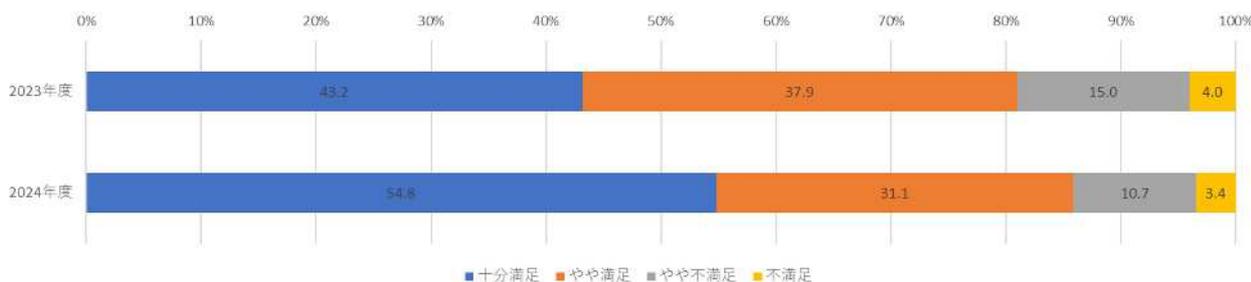
I. 教育実習

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	73.9	23.9	1.6	0.5
2023年度	73.6	22.0	2.6	1.8
2024年度	76.7	20.4	2.4	0.5



J. 教職実践演習

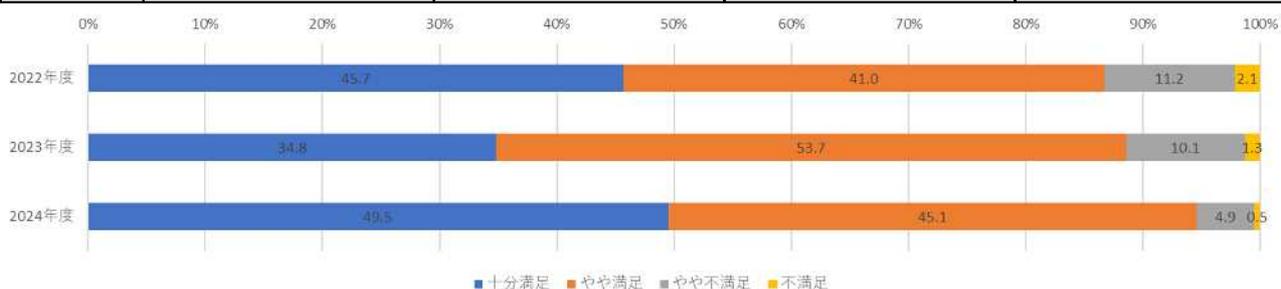
	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	43.2	37.9	15.0	4.0
2024年度	54.8	31.1	10.7	3.4



<授業の進め方など>

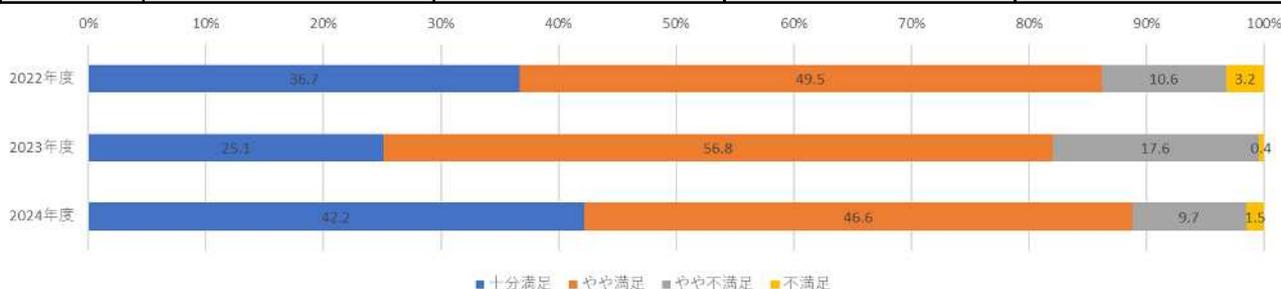
K. 授業内容の必要性や位置づけの明示の仕方

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	45.7	41.0	11.2	2.1
2023年度	34.8	53.7	10.1	1.3
2024年度	49.5	45.1	4.9	0.5



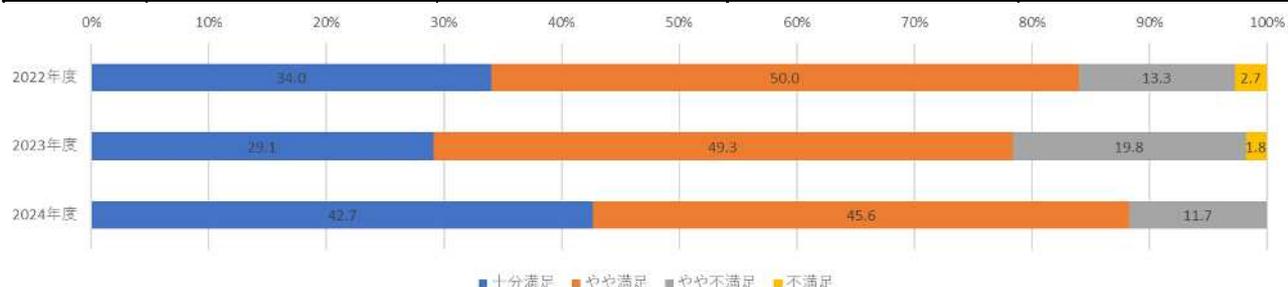
L. 学生の参加を積極的に促す工夫

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	36.7	49.5	10.6	3.2
2023年度	25.1	56.8	17.6	0.4
2024年度	42.2	46.6	9.7	1.5



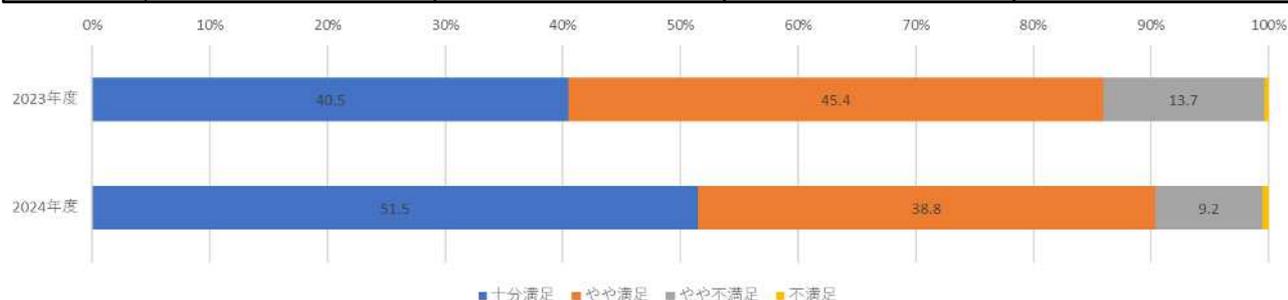
M. 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	34.0	50.0	13.3	2.7
2023年度	29.1	49.3	19.8	1.8
2024年度	42.7	45.6	11.7	0.0



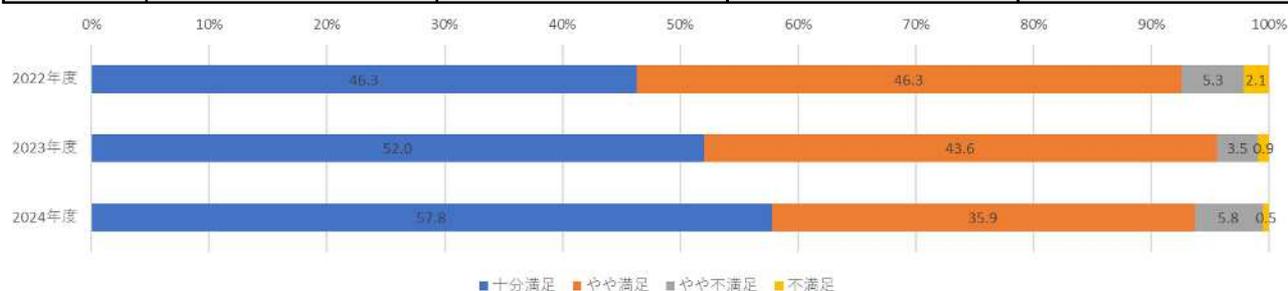
N. 履修ガイダンスやシラバスによる情報提供

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	40.5	45.4	13.7	0.4
2024年度	51.5	38.8	9.2	0.5



O. 成績評価の方法

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	46.3	46.3	5.3	2.1
2023年度	52.0	43.6	3.5	0.9
2024年度	57.8	35.9	5.8	0.5



☆ 授業科目やカリキュラムの満足度の分析

＜授業科目やカリキュラム（臨床経験科目を除く）＞

「A. 共通教育科目の内容」については、満足（「十分満足」「やや満足」の合計）が2022年度95.7%、2023年度89.0%、2024年度95.2%と、一貫して高い水準を維持している。2023年度にやや低下したものの、2024年度には回復している。

「B. 1年次に受講可能な専門科目の数」については、満足が2022年度85.6%、2023年度83.7%、2024年度85.0%と、8割以上の高い水準を維持している。ただし、不満足（「やや不満足」「不満足」の合計）も14～16%程度あり、前回調査時（2021年度17.5%）と同様、一定数の学生が科目数に課題を感じている状況が続いている。

「C. コース指定された必修の専門科目の内容」については、肯定的回答が2023年度93.8%、2024年度94.1%と、90%以上の高い水準を一貫して維持している。「不満足」という回答も0.4～1.0%と低く、良好な満足度を保っている。

「D. 所属コースの専門科目の内容」については、満足が2022年度94.2%、2023年度92.9%、2024年度95.6%と、一貫して9割を超える高い満足度を維持している。専門教育の質が安定的に保たれていることが示されている。

「E. 卒業研究の指導」については、満足が2022年度91.5%、2023年度89.4%、2024年度95.6%と、非常に高い水準を維持している。特に「十分満足」という回答については、2024年度は76.7%に達しており、前回調査時（2021年度64.3%）を上回る満足度を示している。卒業研究指導の質の高さが維持されていることが確認できる。

＜授業科目やカリキュラム（臨床経験科目）＞

「F. 教職・カリキュラム論（教育臨床入門）」については、満足が2022年度94.1%、2023年度85.0%、2024年度85.0%と、2023年度以降やや低下している。前回調査時（2021年度96.2%）と比較すると約10ポイントの低下が見られ、カリキュラム変更等の影響が考えられる。

「G. 教育臨床演習」については、満足が2022年度87.3%、2023年度82.3%、2024年度89.8%と変動が見られる。2023年度に一時低下したものの、2024年度には回復している。前回調査時（2021年度95.5%）と比較するとやや低いが、概ね良好な水準を維持している。

「H. 教育実習 事前・事後指導」については、満足が2022年度92.0%、2023年度92.5%、2024年度89.8%と、一貫して9割前後の高い満足度を維持している。前回調査時（2021年度89.0%）と同等の水準であり、事前・事後指導の質が安定的に保たれている。

「I. 教育実習」については、満足が2022年度97.8%、2023年度95.6%、2024年度97.1%と、圧倒的に高い満足度を示している。特に「十分満足」が3年間を通じて7割を超えており、前回調査時（2021年度95.5%）と同様、教育実習そのものへの満足度が極めて高いことが確認できる。

「J. 教職実践演習」については、満足が2023年度81.1%、2024年度85.9%と向上傾向にある。2023年度から新設された項目のため過去との比較はできないが、2024年度には「十分満足」が54.8%に達し、「やや満足」を含めると8割以上の満足度を得ている。教職課程の総まとめとなる科目として、着実に機能していることがうかがえる。

＜授業の進め方など＞

「K. 授業内容の必要性や位置づけの明示の仕方」については、満足が2022年度86.7%、2023年度88.5%、2024年度94.6%と着実に向上している。前回調査時（2021年度88.9%）と比較しても、改善傾向が明確である。

「L. 学生の参加を積極的に促す工夫」については、満足が2022年度86.2%、2023年度81.9%、2024年度88.8%と変動が見られる。2023年度に一時低下したが、2024年度には回復している。前回調査時（2021年度87.0%）と同等の水準を維持している。

「M. 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫」については、満足が2022年度84.0%、2023年度78.4%、2024年度88.3%と、2023年度に一時低下したものの2024年度には大きく回復している。前回調査時（2021年度83.7%）と同等以上の水準に戻っている。

「N. 履修ガイダンスやシラバスによる情報提供」については、満足が2023年度85.9%、2024年度90.3%と向上傾向にある。2023年度から独立した項目として設定されたが、2024年度には「十分満足」が51.5%に達し、「やや満足」を含めると9割以上の満足度を得ている。履修ガイダンスやシラ

【第1部：教育学部】3. 過去3年間の年度別調査の分析

バスの充実により、学生への情報提供が着実に改善されていることが示されている。

「0. 成績評価の方法」については、満足が2022年度92.6%、2023年度95.6%、2024年度93.7%と、一貫して9割を超える高い満足度を維持している。前回調査時（2021年度92.9%）と同様、成績評価方法に対する信頼が安定的に保たれている。

全体として、臨床経験科目を除く授業科目では9割前後の高い満足度を維持しており、臨床経験科目では特に教育実習が極めて高い評価を得ている。授業の進め方についても8～9割の満足度を示しており、教育の質が安定的に保たれていることが確認できる。ただし、2023年度に一部の項目で満足度の低下が見られたことから、継続的な改善の取り組みが重要である。

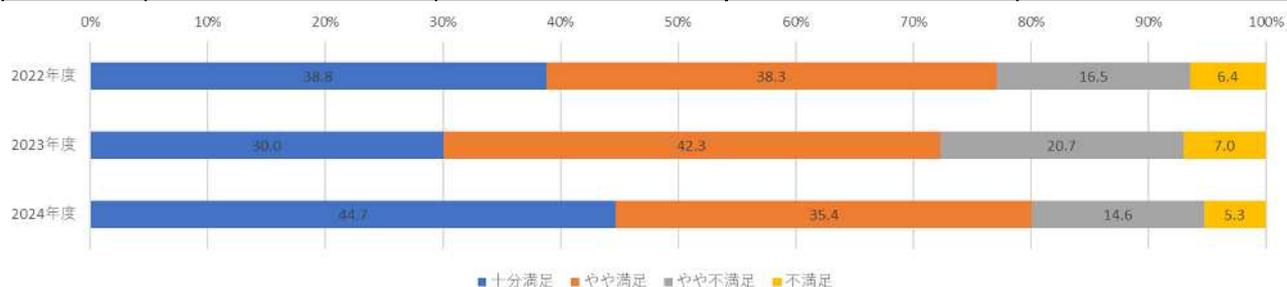
(4) 学生支援や施設・設備環境の満足度

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q4 次の項目について、あなたの満足度をおたずねします。
※この項目は2023年度から新設（就職・進学支援を除く）

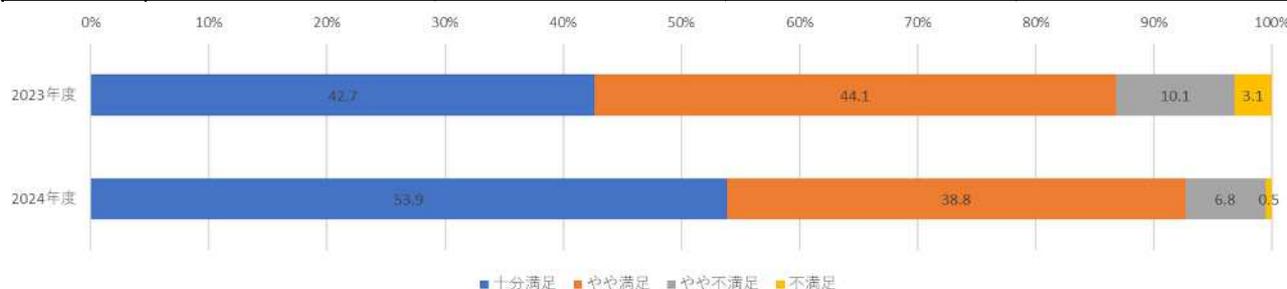
A. 就職・進学支援

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	38.8	38.3	16.5	6.4
2023年度	30.0	42.3	20.7	7.0
2024年度	44.7	35.4	14.6	5.3



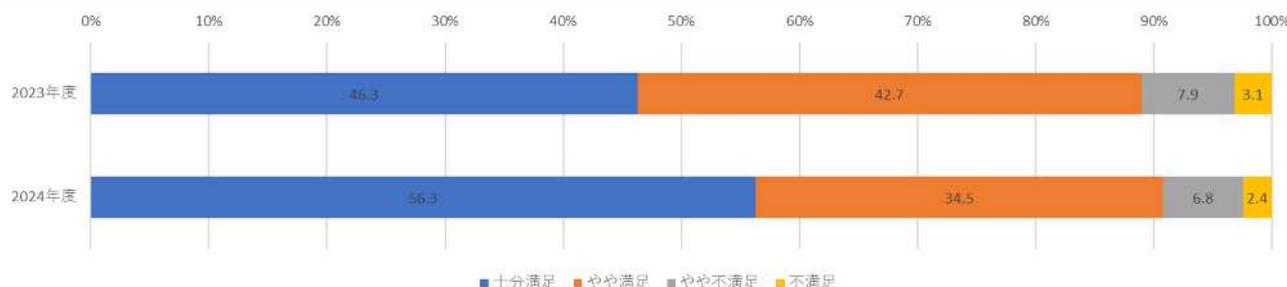
B. 健康な学生生活を送るための情報や支援

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	42.7	44.1	10.1	3.1
2024年度	53.9	38.8	6.8	0.5



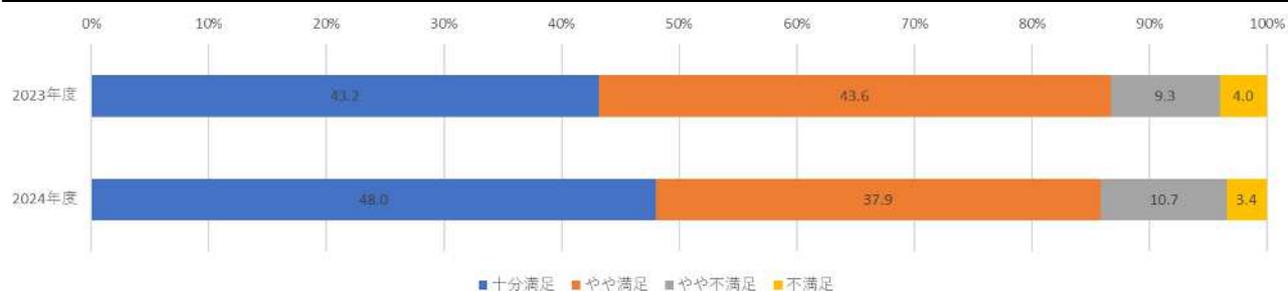
C. 図書館のサービス（蔵書、施設、協働学習スペース等）

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	46.3	42.7	7.9	3.1
2024年度	56.3	34.5	6.8	2.4



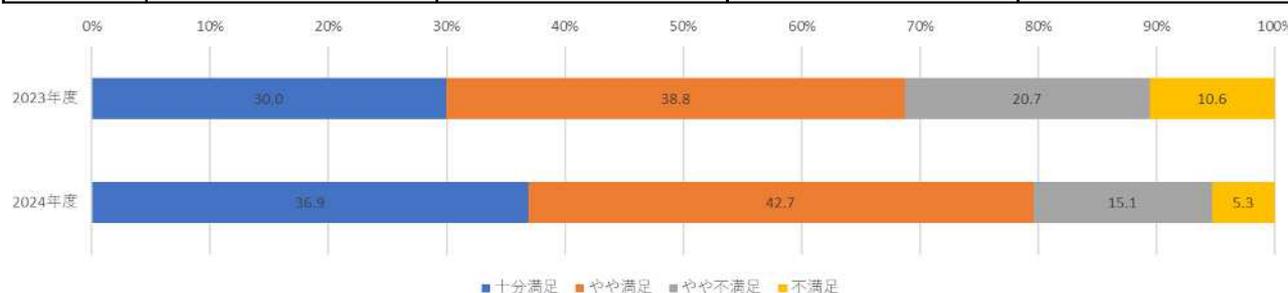
D. 講義室・実験室等の施設・設備

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	43.2	43.6	9.3	4.0
2024年度	48.0	37.9	10.7	3.4



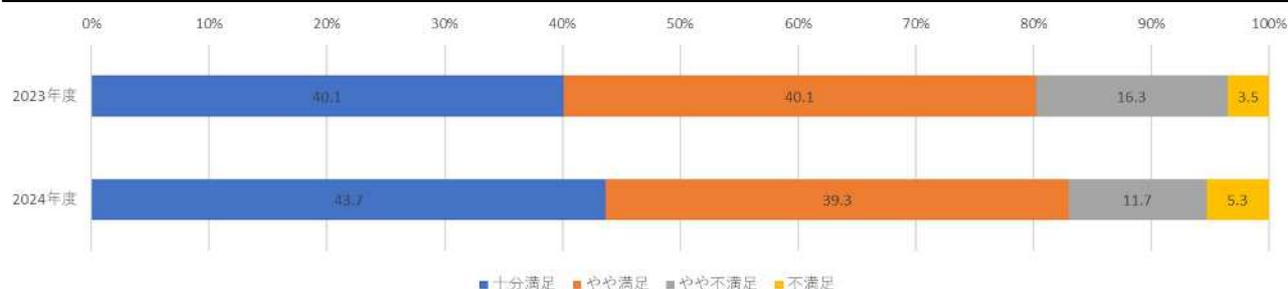
E. ICT環境（Wi-Fi等）の設備

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	30.0	38.8	20.7	10.6
2024年度	36.9	42.7	15.1	5.3



F. 自習場所（図書館、学生演習室、リフレッシュコーナー、空き教室等）

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2023年度	40.1	40.1	16.3	3.5
2024年度	43.7	39.3	11.7	5.3



☆ 学生支援や施設・設備環境の満足度の分析

この項目は、Aを除いて2023年度から新設されたため、前回調査との比較はできないが、2年間の推移と現状について分析する。

「A. 就職・進学支援」については、満足（「十分満足」「やや満足」の合計）が2022年度77.1%、2023年度72.3%、2024年度80.1%と推移している。2023年度に一時低下したものの、2024年度には改善している。ただし、不満足（「やや不満足」「不満足」の合計）も約2割あり、継続的な支援の充

実が求められる領域である。

「B. 健康な学生生活を送るための情報や支援」については、満足が2023年度86.8%、2024年度92.7%と顕著に向上している。特に2024年度は「十分満足」が53.9%に達しており、障害学生支援室との連携を含む学生の健康支援体制の充実化が成果を上げてきている様子がうかがえる。

「C. 図書館のサービス」については、満足が2023年度89.0%、2024年度90.8%と、一貫して9割前後の高い満足度を示している。蔵書や施設、協働学習スペースなどが学生のニーズに応えていることが確認できる。

「D. 講義室・実験室等の施設・設備」については、満足が2023年度86.8%、2024年度85.9%と、8割台後半の満足度を維持している。概ね良好な評価であるが、不満足も約14%あり、継続的な施設整備が求められる。

「E. ICT環境（Wi-Fi等）の設備」については、満足が2023年度68.8%、2024年度79.6%と向上傾向にある。しかし、他の項目と比較すると満足度が低く、不満足も2024年度で20.4%と高い。デジタル化が進む中で、ICT環境のさらなる充実が優先課題といえる。

「F. 自習場所」については、満足が2023年度80.2%、2024年度83.0%と、8割以上の満足度を得ている。図書館や学生演習室などの学習環境が一定の評価を得ているが、不満足も約17%あり、学習スペースの拡充が望まれる。

全体として、学生支援や施設・設備環境については、多くの項目で8～9割の満足度を得ているものの、ICT環境や就職・進学支援など、改善の余地がある領域も明確になっている。特にICT環境については、満足度が他項目より低く、優先的な改善が求められる。

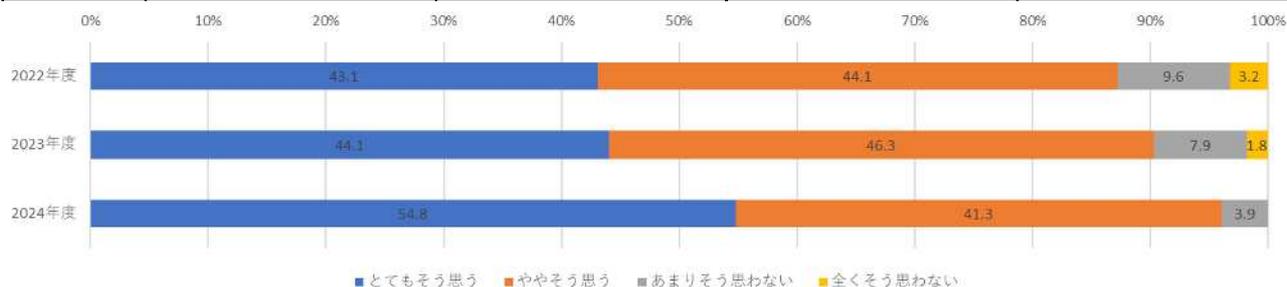
(5) 学生自身の学習・生活について

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q5 あなた自身の大学での学習・生活についておたずねします。
次の項目について、あなたの考えに近いものを選んでください。

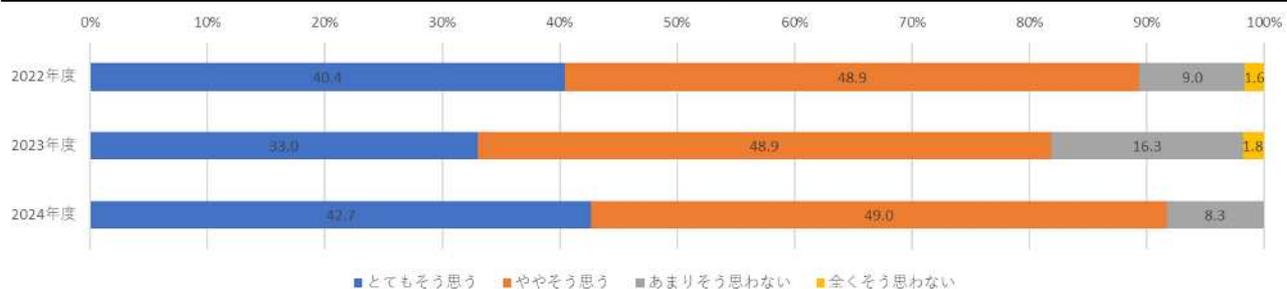
1. 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
2022年度	43.1	44.1	9.6	3.2
2023年度	44.1	46.3	7.9	1.8
2024年度	54.8	41.3	3.9	0.0



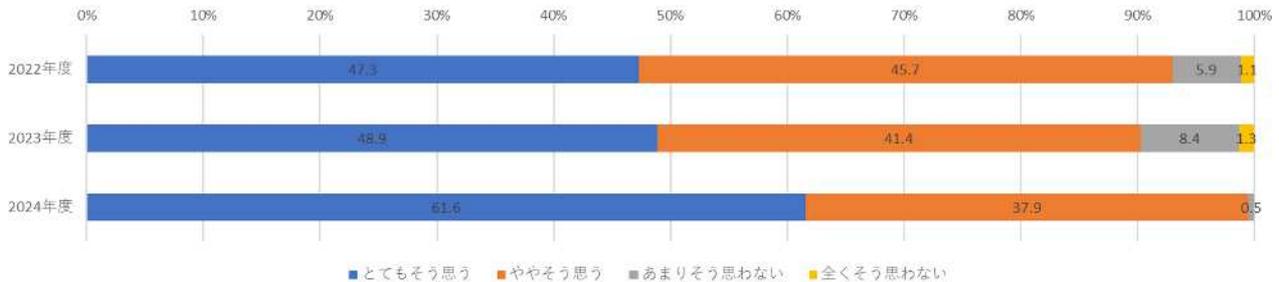
2. 日常生活経験や社会情勢などと講義の内容を関連させつつ学べた

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
2022年度	40.4	48.9	9.0	1.6
2023年度	33.0	48.9	16.3	1.8
2024年度	42.7	49.0	8.3	0.0



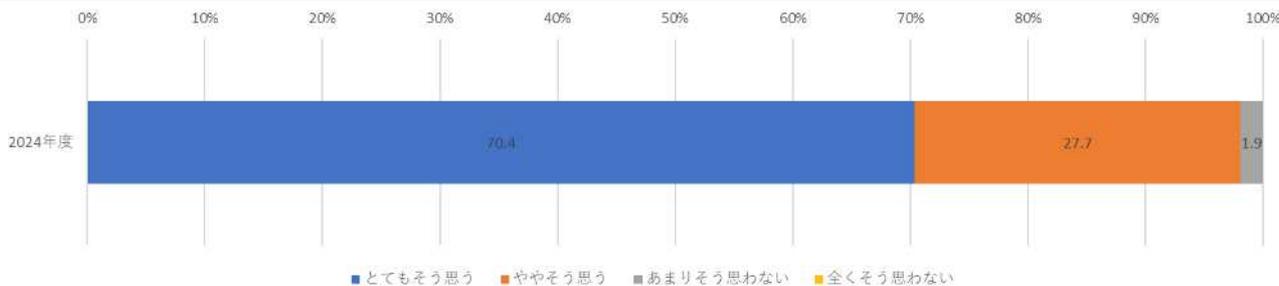
3. 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
2022年度	47.3	45.7	5.9	1.1
2023年度	48.9	41.4	8.4	1.3
2024年度	61.6	37.9	0.5	0.0



4. 3年次に教育実習を経験したことは、進路選択の上で役立った (2024年度新設)

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
2024年度	70.4	27.7	1.9	0.0



☆ 学生自身の学習・生活についての分析

「1. 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた」については、肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計）が2022年度87.2%、2023年度90.4%、2024年度96.1%と着実に向上している。特に2024年度は「とてもそう思う」が54.8%、「全くそう思わない」が0.0%となるなど、非常に良好な水準を維持している。履修指導や学生支援の充実により、学生が将来を見据えた計画的な学修を行えるようになってきていることがうかがえる。

「2. 日常生活経験や社会情勢などと講義の内容を関連させつつ学べた」については、肯定的な回答が2022年度89.3%、2023年度81.9%、2024年度91.7%と推移している。2023年度に一時低下したものの、2024年度には大きく回復している。前回調査時（2021年度85.0%）と比較すると、概ね同等以上の水準を維持している。講義内容と実社会との関連付けを重視する教育が、一定の成果を上げていることが示されている。

「3. 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた」については、肯定的な回答が2022年度93.0%、2023年度90.3%、2024年度99.5%と、一貫して極めて高い水準を示している。特に2024年度は「とてもそう思う」が61.6%、否定的な回答がわずか0.5%となっており、前回調査時（2021年度：「とてもそう思う」46.8%、否定的回答9.7%）と比べると大きく改善されている。「臨床の知」の理念に基づく理論と実践の往還が、学生に強く実感されていることが明確に示されている。

「4. 3年次に教育実習を経験したことは、進路選択の上で役立った」は2024年度から新設された項目であり、肯定的な回答が98.1%と極めて高い評価を得ている。「とてもそう思う」が70.4%に達しており、3年次実習の時期設定が学生の進路決定に大きく貢献していることが確認できる。

全体として、学生の学習・生活に関する自己評価は非常に高く、特に実践的経験と講義内容との関

【第1部：教育学部】3. 過去3年間の年度別調査の分析

連付けについては、ほぼ全員が肯定的に評価している。教育学部の理念である「臨床の知」に基づく教育が、学生の学びの充実に確実に結びついていることが実証されている。

(6) 共通教育について

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q6 共通教育に関する以下の質問項目に対して、該当するものを選択してください。

※2023年度から一部設問変更

A. 共通教育を通して、他者と協働して主体的に学ぶきっかけが得られましたか

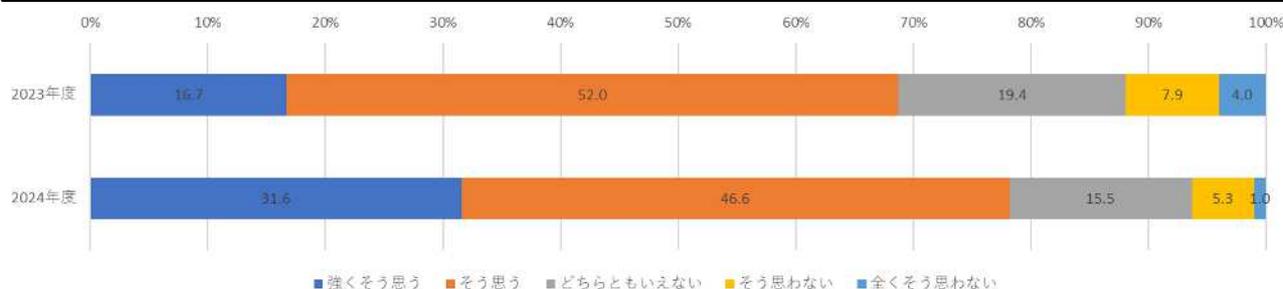
※2023年度から「他者と協働して」を追加

	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
2022年度	31.4	44.7	17.6	5.9	0.5
2023年度	23.3	41.9	19.8	8.8	6.2
2024年度	30.1	54.4	12.1	2.4	1.0



B. 共通教育を通して、思考力・判断力・表現力が高まったと思いますか（2023年度新設）

	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
2023年度	16.7	52.0	19.4	7.9	4.0
2024年度	31.6	46.6	15.5	5.3	1.0



C. 共通教育を通して、大学における学習の基礎となる知識・技能を得ることができましたか

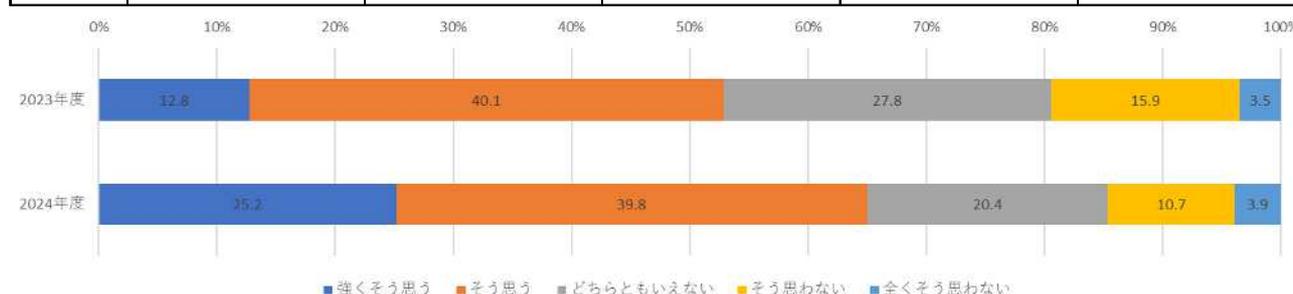
※2023年度から表現変更（「専門教育につながる基礎力」→「大学における学習の基礎となる知識・技能」）

	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
2022年度	30.3	41.5	17.6	9.0	1.6
2023年度	21.1	45.8	20.7	9.3	3.1
2024年度	30.1	50.0	16.0	3.4	0.5



D. 1年次及び2年次の英語科目を通して、専門課程での学習の基礎となる知識や英語運用能力を身につけることができましたか（2023年度新設）

	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
2023年度	12.8	40.1	27.8	15.9	3.5
2024年度	25.2	39.8	20.4	10.7	3.9



☆ 共通教育についての分析

注意：2023年度から設問内容が大幅に変更されているため、継続的な比較が困難な項目もあるが、傾向を読み取ることは可能である。

「A. 他者と協働して主体的に学ぶきっかけ」については、肯定的な回答（「強くそう思う」「そう思う」の合計）が2022年度76.1%、2023年度65.2%、2024年度84.5%と推移している。2023年度に一時大きく低下したが、2024年度には顕著に回復し、前回調査時（2021年度62.3%）を大きく上回る水準に達している。2023年度の設問変更で「他者と協働して」が追加されたことが、一時的な評価低下の要因と考えられるが、その後の改善は、協働学習の取り組みが成果を上げていることを示している。

「B. 思考力・判断力・表現力」は2023年度から新設された項目であり、肯定的な回答が2023年度68.7%、2024年度78.2%と向上傾向にある。特に2024年度は「強くそう思う」が31.6%と大幅に増加しており、共通教育における汎用的能力の育成が着実に進んでいることがうかがえる。

「C. 大学における学習の基礎となる知識・技能」については、肯定的な回答が2022年度71.8%、2023年度66.9%、2024年度80.1%と推移している。2023年度の設問変更（「専門教育につながる基礎力」→「大学における学習の基礎となる知識・技能」）に伴い一時低下したものの、2024年度には大きく改善している。前回調査時（2021年度59.1%）と比較すると、20ポイント以上の大幅な向上を示している。

「D. 英語運用能力」は2023年度から新設された項目であり、肯定的な回答が2023年度52.9%、2024年度65.0%と向上傾向にある。ただし、他の項目と比較すると満足度が低く、否定的な回答も2024年

【第1部：教育学部】3. 過去3年間の年度別調査の分析

度で14.6%あることから、英語教育のさらなる充実が課題として浮かび上がっている。「どちらともいえない」が約20～28%と高いことも特徴的であり、学生が英語学習の効果を実感しにくい状況がうかがえる。

全体として、共通教育については、2023年度の設定変更に伴う一時的な評価低下が見られたものの、2024年度には多くの項目で改善が見られる。特に協働学習のきっかけや基礎的知識・技能の習得については8割以上の肯定的評価を得ており、共通教育の充実が進んでいることが確認できる。一方、英語教育については、今後さらなる改善の余地があることが示されている

【第 2 部：教育学研究科】

1. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は信州大学教育学研究科に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学研究科のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、研究科改革の指針に活かすことを目的とする。

本研究科は長野県における唯一の国立大学法人の教職大学院として平成28年度（2016年度）に開設され今年度で10年目を迎える。本教育学研究科は、学ぶ場を可能な限り学校現場にシフトさせて授業を展開する拠点校方式、教員の多様な専門性と学生の多様な実践経験をクロスさせた指導体制を特徴とし、生涯学び続ける教員の養成を目指してきた。しかし、近年、社会・経済状況の急速な変化を背景として、多様な教育問題への教員の対応能力がますます問われるようになってきている。

そこで、本調査では、教育学研究科における専門の教育や研究を学生がどのように受け止めているかを把握し、調査結果を生かした教育・研究を探るものである。

(2) 調査内容

本調査では「院2年生用」の調査票を作成し調査を実施した。なお、教育学研究科での学習の成果や課題をより明確に把握することを目的に、2023年度調査より調査項目を改定した。調査票の質問項目は、以下に示すとおりである。

【2022年度】

・ 回答者の属性: 3項目

コース等及びプログラム、進路予定

・ 教育学研究科学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度: 6項目

本研究科の学位授与の方針6点それぞれについて、修了時点でどの程度達成されているかを尋ねた。

・ 高度教職実践専攻の特色や授業科目等に対する満足度: 8項目

本専攻の特色となっている教育・指導体制、授業の開講体制、授業科目に対する満足度を尋ねた。また、これらに対し「やや不満」「不満」と回答したものについて、その問題点や改善点を自由記述で尋ねた。

・ 面接練習・各種相談の利用状況: 5項目

採用試験に向けた面接練習、大学や教員によるキャリア相談・学生相談の利用状況を尋ねた。

・ 大学での学習や生活における優れた点および改善点: 3項目（自由記述）

大学が行う学生生活支援・健康支援・進学支援・学生相談、大学および拠点校の施設・設備、教員や事務職員の対応について優れた点と改善点について、自由記述で尋ねた。

・ 教職大学院への進学を推奨する意思の有無: 2項目（自由記述1項目）

後輩や同僚などに教職大学院への進学を勧めたいかを尋ね、その理由については自由記述で尋ねた。

・ 教育学研究科に伝えたい意見・要望: 1項目（自由記述）

本調査に含まれない内容や意見、要望について自由記述で尋ねた。

【2023～24年度】

・ 回答者の属性: 3項目

コース等及びプログラム、進路予定

・ 教育学部・教育学研究科の教育研究について: 4項目

本学部・本研究科が目標とする「臨床の知」「附属学校園の活用」「地域社会との連携」の達成に向

けた教育研究が行われているかを尋ねた。

・ 教育学研究科学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度：6項目

本研究科の学位授与の方針6点それぞれについて、教職大学院で受けた教育によりどの程身につけることができたかを尋ねた。

・ 高度教職実践専攻の特色や授業科目等に対する満足度：8項目

本専攻の特色となっている教育・指導体制、授業の開講体制、授業科目に対する満足度を尋ねた。

・ 面接練習・各種相談の利用状況：5項目

採用試験に向けた面接練習、大学や教員による就学相談・キャリア相談等の利用状況を尋ねた。

・ 大学での学習や生活等における優れた点および改善点：5項目（自由記述）

授業科目やカリキュラム、学生支援や学生相談体制、大学および拠点校の施設・設備、教員や事務職員の対応等について優れた点と改善点について、自由記述で尋ねた。

・ 教職大学院への進学を推奨する意思の有無：2項目（自由記述1項目）

後輩や同僚などに教職大学院への進学を勧めたいかを尋ね、その理由については自由記述で尋ねた。

・ 教員のICT活用指導力チェックリストについて：16項目（満足度調査と同時実施）

文部科学省「教員のICT活用指導力チェックリスト」の各項目について達成度を尋ねた。

(3) 調査対象

本調査の対象者は信州大学教育学研究科に在籍する2年生である。調査対象者数は次のとおりである。

2022年度に2年生である者	31名
2023年度に2年生である者	30名
2024年度に2年生である者	28名

(4) 調査方法

調査は学部の自己点検・評価委員会が主体となり、調査目的に即した調査項目を作成した。

調査期間と配布方法については、集計の簡便さを考慮し、2022年度からはeALPSを活用し、締め切り期限を延長するとともに未回答者に対してリマインドメールを送信して回答促進を図った。2023年度からは、実践研究報告会およびeALPSにて回答を依頼し、未回答者に対してはリマインドメールを送信した。

これらの方法により、ここ3年間は100%の回収率を維持している。

(5) 回収結果

年度別の有効数と回答率は次のとおりである。

	対象者数 (人)	回答数 (人)	回答率 (%)
2022年度	31	31	100
2023年度	30	30	100
2024年度	28	28	100

2. 調査結果の要約

信州大学大学院教育学研究科に在籍する学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや授業の満足度、大学での学習と生活等について実態を把握し、今後の教育学研究科のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、大学院改革の指針に活かすことを目的として本調査を実施してきた。今回はじめての報告となる。調査結果の要約は以下のとおりである。

(1) 教育学研究科の教育研究の実現度合

教育学研究科の教育研究の実現度合（「そう思う」「ややそう思う」）は次の通りである。「A. 高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者を育成している。」については、2023年度、2024年度ともに100%である。「B. 附属学校園を積極的に活用し、新たなカリキュラムや教材の開発、指導法の工夫など教育現場に役立つ教育研究を推進している。」については、2023年度の100%から、2024年度に96.43%に移行している。「C. 教育委員会や地域の諸学校と連携し、不登校や学力問題など多様な教育課題に対応し、専門的な支援を行っている。」については、2023年度93.34%から、2024年度に85.71%に移行している。「D. 地域社会の要請に応えるため、生涯教育、リフレッシュ教育、現職教育等を充実させ、開かれた教育・研究体制を構築している。」については、2023年度の93.33%から2024年度に89.29%に下降している。

(2) 教育学研究科学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度

教育学研究科学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度（「そう思う」「ややそう思う」）は次の通りである。「A. 教育の専門職としての学識・技能」については、2023年度は96.67%、2024年度は100%へと上昇している。「B. 教育現場の諸課題の背景にある関係構造に気づく視点」については、2023年度は100%、2024年度96.43%に移行している。「C. 子どもの多様なニーズへの対応力」については、2023年度は96.67%、2024年度は92.86%へと移行している。「D. 協働的な問題解決を可能にする人間関係構築力」については、2023年度は93.34%、2024年度は92.86%へと移行している。「E. 既存の枠組みを超える柔軟な発想力と深い省察力」については、2023年度は93.33%から、2024年度は92.86%へと移行している。「F. 社会の一員である教員として生きる意志と倫理観」については、2023年度は96.67%から2024年度は92.86%へと移行している。

(3) 高度教職実践専攻の特色や授業科目等に対する満足度

高度教職実践専攻の特色や授業科目等に対する満足度（「充分満足」「やや満足」）は次の通りである。「A. 学校拠点方式」については、2023年度は96.78%から、2024年度は89.67%、2024年度は、96.43%へと移行している。「B. 専門性の異なる複数教員による指導体制」については、2022年度は96.71%から、2023年度は100%へと移行。2022年度の3.23%を除き、すべて「充分満足」「やや満足」と評価されている。「C. 様々な背景を持った院生とのチーム演習」については、2022年度は74.19%から、2023年度は86.67%、2024年度は92.86%へと上昇している。2022年度93.54%、2023年度86.67%、2024年度92.86%と高い満足度を得ている。「D. 履修選択プログラム制による履修制度」については、2022年度は96.77%から、2023年度は96.67%、2024年度96.43%を占める。「E. 集中講義（土日や長期休業期間中）の開講体制」については、2022年度は96.78%、2023年度は93.33%、2024年度は100%へと変化した。「F. 必修科目（共通5領域）（「特色ある教育課程の編成と評価」「授業研究と教育評価」「特別な教育的ニーズのある子どもの支援体制」「学級づくりと学校づくり」「未来の学校と期待される教師Ⅰ・Ⅱ」）」については、2022年度、2023年度、2024年度ともに100%を維持している。すべての年度で、「充分満足」が70%以上、「満足」が25%以上を占めている。「G. プログラム科目」については、2022年度93.55%から、2023年度93.34%、2024年度96.43%と90%以上を維持している。「H. 学校実習科目」については、2022年度の100%から、2023年度は96.66%、2024年度は、92.86%へと移行している。2023年度の「不満足」（3.33%）と2024年度の「やや不満足」（7.14%）以外は、「充分満足」「やや満足」をキープしている。

(4) 面接練習・各種相談への満足度

まず、「学部卒院生」が回答した「A. 就職相談室」「B. 教員採用試験に向けて大学が実施している面接練習」「C. 担当教員や現職教員院生等による面接練習」「D. 担当教員等による修了後のキャリアに関する相談」である。

「A」については、2022年度は、「利用したことがある」(3.23%)「利用したことがない」(22.58%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(22.58%)から、2023年度は「利用したことがある」(6.25%)「利用したことがない」(62.50%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(31.25%)、2024年度は、「充分満足」(7.69%)「やや満足」(69.23%)「やや不満足」(23.08%)である。

「B」については、2022年度は、「利用したことがある」(9.68%)「利用したことがない」(16.13%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(22.58%)から、2023年度は「利用したことがある」(37.50%)「利用したことがない」(31.25%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(31.25%)、2024年度は、「利用したことがある」(30.77%)「利用したことがない」(38.46%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(30.77%)である。

「C」については、2022年度は、「利用したことがある」(3.23%)「利用したことがない」(22.58%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(22.58%)から、2023年度は「利用したことがある」(37.50%)、「利用したことがない」(31.25%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(31.25%)、2024年度は、「利用したことがある」(15.38%)、「利用したことがない」(61.54%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(23.08%)である。

「D」については、2022年度は、「相談したことがある(のべ1時間以上)」(15.00%)、「相談したことがある(のべ1時間未満)」(5.00%)「相談したことがない」(50.00%)から、2023年度は「相談したことがある(のべ1時間以上)」(56.25%)、「相談したことがある(のべ1時間未満)」(18.75%)「相談したことがない」(20.00%)、2024年度は、「相談したことがある(のべ1時間以上)」(23.08%)、「相談したことがある(のべ1時間未満)」(7.69%)「相談したことがない」(69.23%)である。

次に、「現職教員院生」は、「E. 担当教員等による修了後のキャリアに関する相談」のみに回答した。「E」については、2022年度は、「相談したことがある(のべ1時間以上)」(3.23%)、「相談したことがある(のべ1時間未満)」(6.45%)「相談したことがない」(45.16%)から、2023年度は「相談したことがある(のべ1時間以上)」(14.29%)、「相談したことがある(のべ1時間未満)」(14.29%)、「相談したことがない」(71.43%)、2024年度は、「相談したことがある(のべ1時間以上)」(6.67%)、「相談したことがある(のべ1時間未満)」(20.00%)、「相談したことがない」(66.66%)である。「相談したことがある(のべ1時間以上)」「相談したことがある(のべ1時間未満)」に着目すると、キャリアに関する相談の利用は、2022年度9.68%、2023年度28.58%、2024年度26.67%と上昇傾向にある。

(5) 教職大学院への進学を推奨する意思の有無

2022年度から徐々に教職大学院を推奨する意思が上昇している。2022年度は、「強く勧めたい」(25.81%)、「勧めたい」(67.74%)、2023年度は「強く勧めたい」(36.67%)、「勧めたい」(56.67%)、2024年度は、「強く勧めたい」(42.86%)、「勧めたい」(53.57%)へと数値が上昇している。それに伴い、2022年度から「勧めたくない」(3.23%)「全く勧めたくない」(3.23%)、2023年度、「勧めたくない」(3.33%)「全く勧めたくない」(3.33%)、2024年度は、「勧めたくない」(3.57%)へと減少している。

(6) 自由記述での意見他

教職大学院への進学について、大きく「学びの充実」「省察や仲間との出会い」「専門性の向上」といった肯定的側面が強調される一方で、「負担の大きさ」「進学後の活かし方の不透明さ」といった課題が浮かび上がった。課題を解消することで、教職大学院の学びをより持続可能で魅力あるものにすると考えられる。

フリートーキングでは、同期や他地区の院生とのつながりが授業外では希薄である「交流の不足」、チーム演習の時間設定やストマスの実習形態の不透明さ、連絡体制の不十分さ、附属教員や高校教員の負担の大きさ、実習やフィールドワークに伴う交通費や生活費の自己負担の重さが課題とし

て指摘された。一方、指導教員の丁寧な指導や学びへの感謝、今後を活かしていきたいという前向きな意見も示されており、大学院での学び自体は意義深いものとして受け止められている。

最後に、本調査に協力いただいた学生の皆さんに感謝し、調査結果の要約とする。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

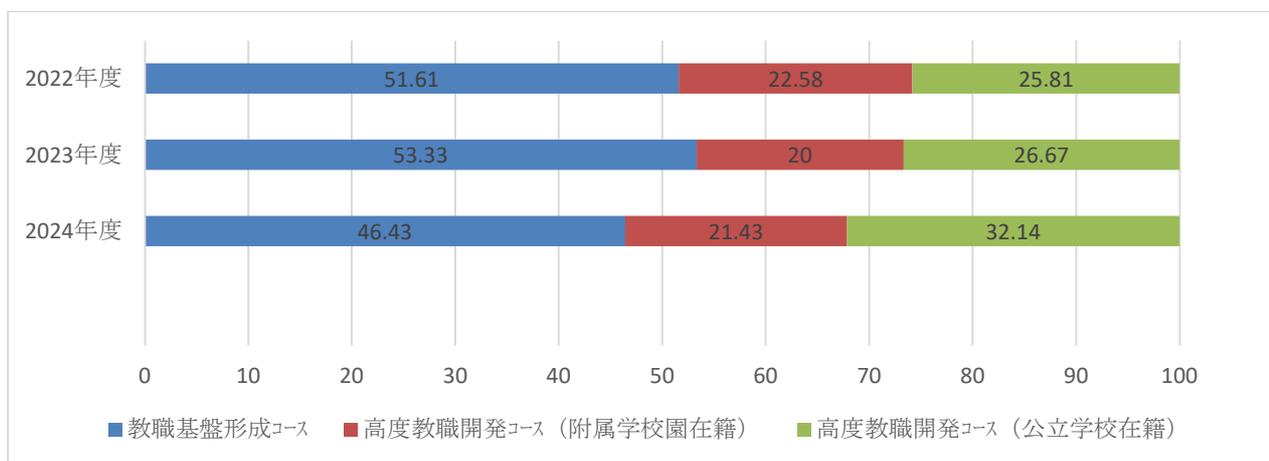
* 教職大学院生（修了直前）のコース・プログラムや進路予定の傾向

項目別の調査結果の分析の前に、教職大学院生（修了直前）のコース、プログラム、進路予定等の3年間の比率推移のグラフを下に示す。

■ 年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

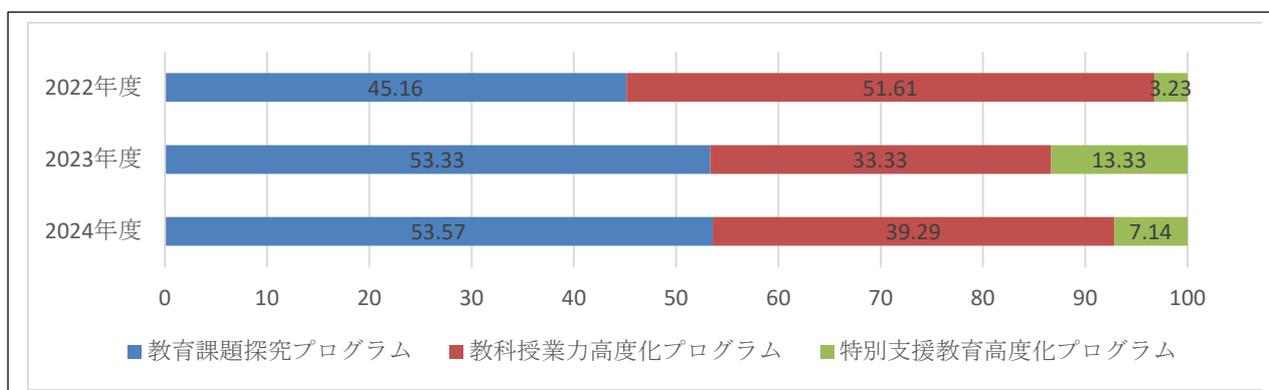
A. コース等

年度	教職基盤形成コース	高度教職開発コース (附属学校園在籍)	高度教職開発コース (公立学校在籍)
2022年度	51.61	22.58	25.81
2023年度	53.33	20.00	26.67
2024年度	46.43	21.43	32.14



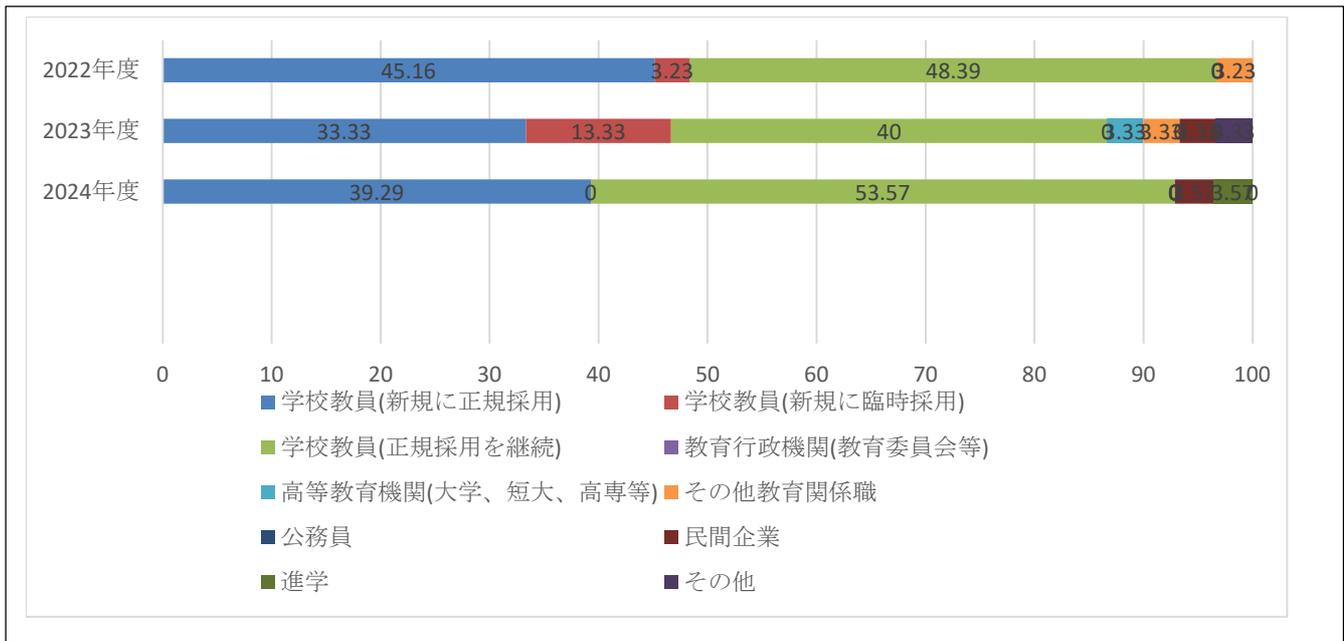
B. プログラム

年度	教育課題探究プログラム	教科授業力高度化プログラム	特別支援教育高度化プログラム
2022年度	45.16	51.61	3.23
2023年度	53.33	33.33	13.33
2024年度	53.57	39.29	7.14



C. 進路予定

年度	学校教員 (新規に 正規採用)	学校教員 (新規に 臨時採用)	学校教員 (正規採用を 継続)	教育行政機関 (教育委員会等)	高等教育機関 (大学、短大、 高専等)	その他 教育関係 職種	公務員	民間企業	進学	その他
2022年度	45.16	3.23	48.39	0.00	0.00	3.23	0.00	0.00	0.00	0.00
2023年度	33.33	13.33	40.00	0.00	3.33	3.33	0.00	3.33	0.00	3.33
2024年度	39.29	0.00	53.57	0.00	0.00	0.00	0.00	3.57	3.57	0.00



(1) 教育学研究科が目指す教育研究の実現度合

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q1 教育学部・教育学研究科の教育研究について

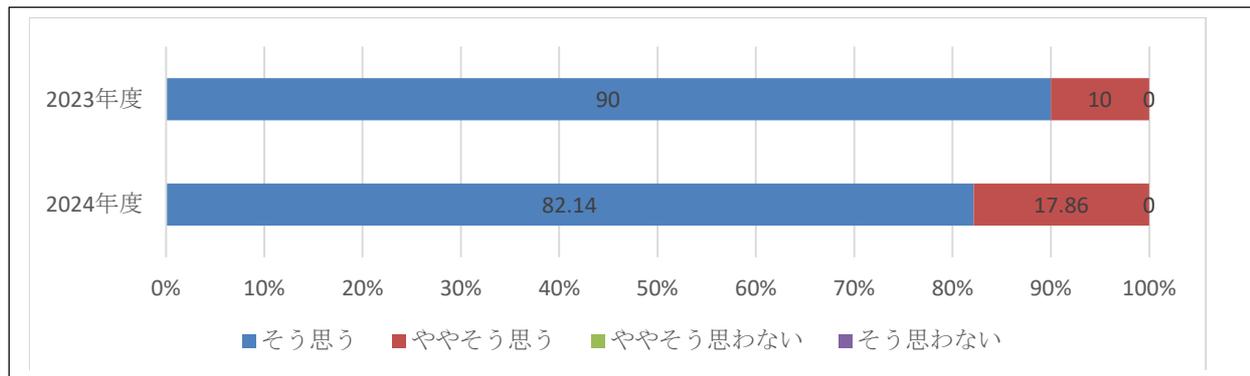
信州大学教育学部・教育学研究科では、教育養成の伝統と実績を踏まえ、「臨床の知」の理念のもとに、次の目標を掲げて教育研究を行なっています。

- ・ 高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者を育成します。
- ・ 附属学校園を積極的に活用し、新たなカリキュラムや教材の開発、指導法の工夫など教育現場に役立つ教育研究を推進します。
- ・ 教育委員会や地域の諸学校と連携し、不登校や学力問題など多様な教育課題に対応し、専門的な支援を行います。
- ・ 地域社会の要請に応えるため、生涯教育、リフレッシュ教育、現職教育等を充実させ、開かれた教育・研究体制を構築します。

現在の信州大学教育学部・教育学研究科は、これらの目標の達成に向けた教育研究を行っていると思いますか。 ※2023年度からの設問

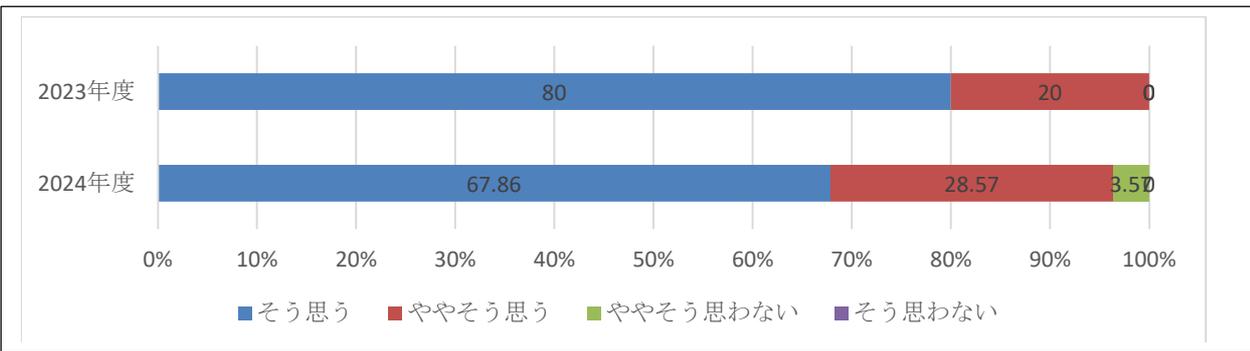
A. 高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者を育成している。

	そう思う	ややそう思う	ややそう思わない	そう思わない
2023年度	90.00	10.00	0.00	0.00
2024年度	82.14	17.86	0.00	0.00



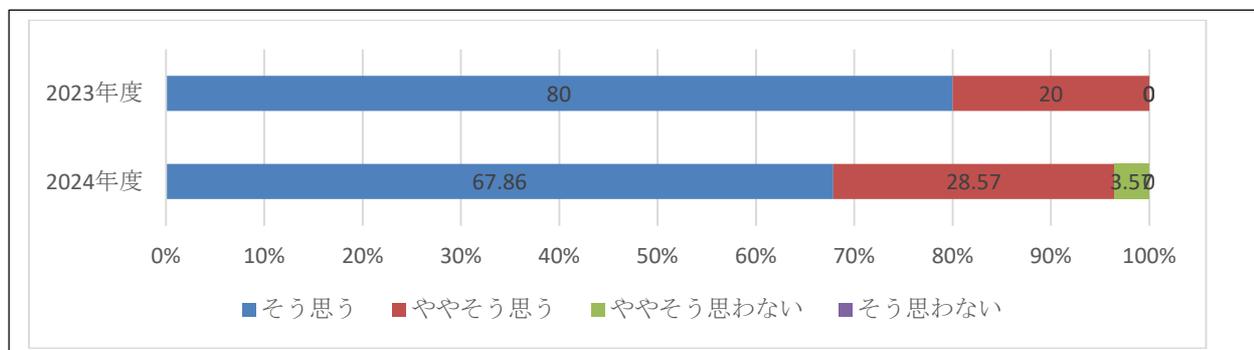
B. 附属学校園を積極的に活用し、新たなカリキュラムや教材の開発、指導法の工夫など教育現場に役立つ教育研究を推進している。

	そう思う	ややそう思う	ややそう思わない	そう思わない
2023年度	80.00	20.00	0.00	0.00
2024年度	67.86	28.57	3.57	0.00



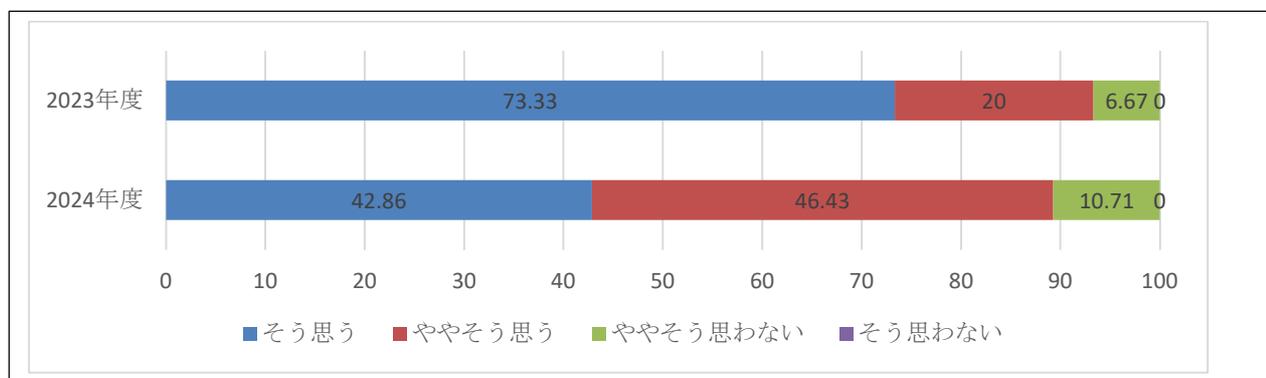
C. 教育委員会や地域の諸学校と連携し、不登校や学力問題など多様な教育課題に対応し、専門的な支援を行っている。

	そう思う	ややそう思う	ややそう思わない	そう思わない
2023年度	66.67	26.67	6.67	0.00
2024年度	35.71	50.00	14.29	0.00



D. 地域社会の要請に応えるため、生涯教育、リフレッシュ教育、現職教育等を充実させ、開かれた教育・研究体制を構築している。

	そう思う	ややそう思う	ややそう思わない	そう思わない
2023年度	73.33	20.00	6.67	0.00
2024年度	42.86	46.43	10.71	0.00



☆教育学研究科が目指す教育研究の実現度合の分析

「A. 高度な専門知識と実践的な教育技術を身につけ、豊かな教養と創造性に溢れた教育者を育成している。」「B. 附属学校園を積極的に活用し、新たなカリキュラムや教材の開発、指導法の工夫など教育現場に役立つ教育研究を推進している。」「C. 教育委員会や地域の諸学校と連携し、不登校や学力問題など多様な教育課題に対応し、専門的な支援を行っている。」「D. 地域社会の要請に応えるため、生涯教育、リフレッシュ教育、現職教育等を充実させ、開かれた教育・研究体制を構築している。」を質問している。

「A」については、2023年度は、「そう思う」(90.0%)、「ややそう思う」(10.0%) から、2024年度は「そう思う」(82.14%)、「ややそう思う」(17.86%) に移行している。「そう思う」から「ややそう思う」への移行が見られるが、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると100%であることから、「A」について評価されていると言える。

「B」については、2023年度は、「そう思う」(80.0%)、「ややそう思う」(20.0%) から、2024年度は「そう思う」(67.86%)、「ややそう思う」(28.57%)、「ややそう思わない」(3.57%) へと移行してい

る。「ややそう思わない」がありつつも、「そう思う」「ややそう思う」で90%以上を占める。

「C」については、2023年度は、「そう思う」(66.67%)、「ややそう思う」(26.67%)「ややそう思わない」(6.67%)から、2024年度は「そう思う」(35.71%)、「ややそう思う」(50.0%)、「ややそう思わない」(14.29%)へと下降している。

「D」については、2023年度は、「そう思う」(73.33%)、「ややそう思う」(20.00%)「ややそう思わない」(6.67%)から、2024年度は「そう思う」(42.86%)、「ややそう思う」(46.43%)、「ややそう思わない」(10.71%)へと下降している。

(2) 教育学部学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q2 教育学研究科学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度について

信州大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）は、「俯瞰力と独創性を備え、持続可能な価値社会を創造する質の高い高度専門職業人」の育成という信州大学大学院学位授与の方針の理念にのっとり、学校と家庭・地域社会の創造的な再構築の担い手として、次世代の人材を育成する資質と能力を備えた教員の養成を期し、以下のように学位授与方針を定めています。

- ・教育の専門職としての学識・技能
- ・教育現場の諸課題の背景にある関係構造に気づく視点
- ・子どもの多様なニーズへの対応力
- ・協働的な問題解決を可能にする人間関係構築力
- ・既存の枠組みを超える柔軟な発想力と深い省察力
- ・社会の一員である教員として生きる意志と倫理観

あなたは、教職大学院で受けた教育により、これらの資質と能力を培い、身につけることができたと思いますか。

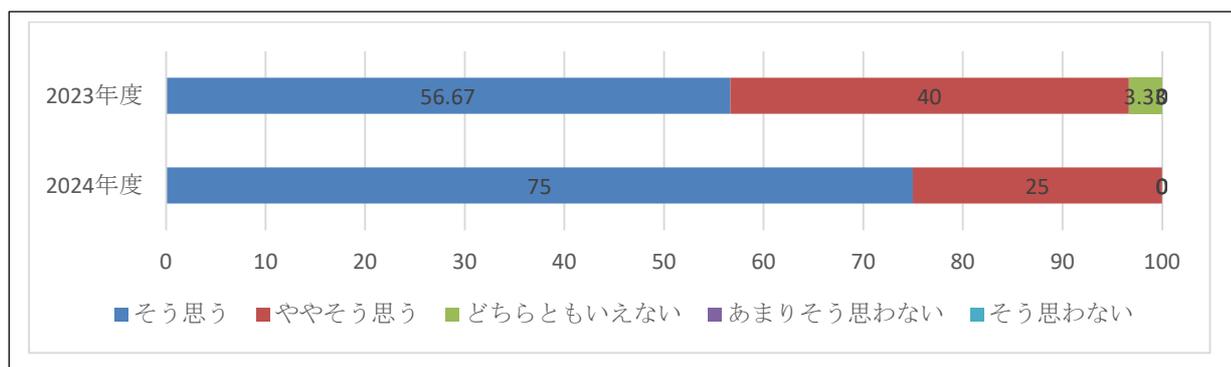
※2022年度 C. を追加。2023年度から選択肢を変更

◇2022年度までの設問

高度教職実践専攻では、学校と家庭・地域社会の創造的な再構築の担い手として、次世代の人材を育成する教員の養成を期し、次の資質・能力を有する者に「教職修士（専門職）」の学位を授与することとしています。現時点での各資質・能力について、5段階で自己評価してください。

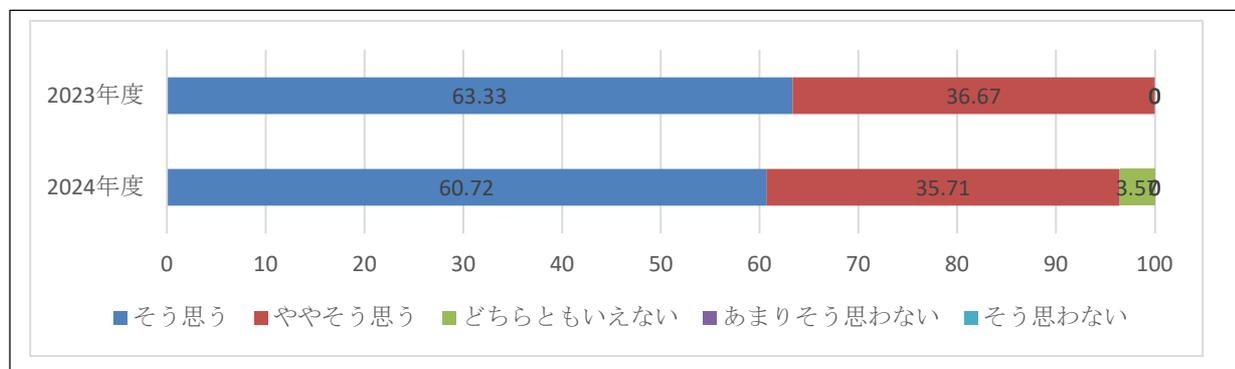
A. 教育の専門職としての学識・技能

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
2023年度	56.67	40.00	3.33	0.00	0.00
2024年度	75.00	25.00	0.00	0.00	0.00



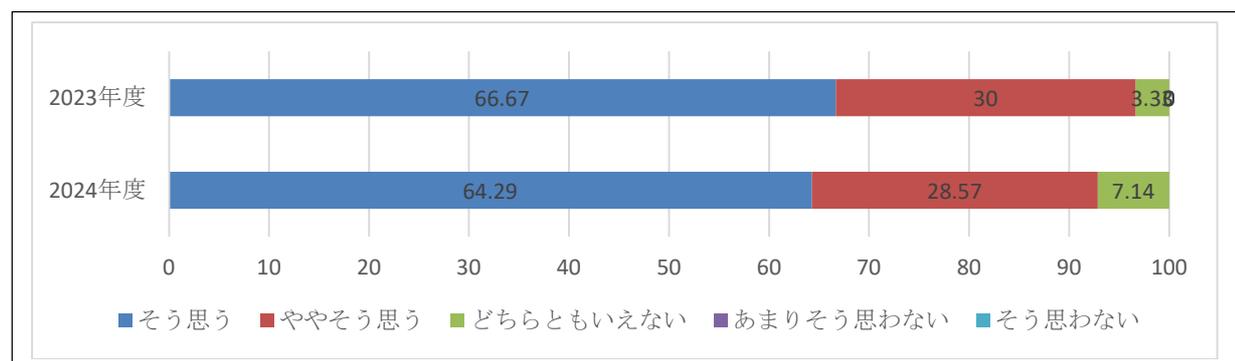
B. 教育現場の諸課題の背景にある関係構造に気づく視点

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
2023年度	63.33	36.67	0.00	0.00	0.00
2024年度	60.72	35.71	3.57	0.00	0.00



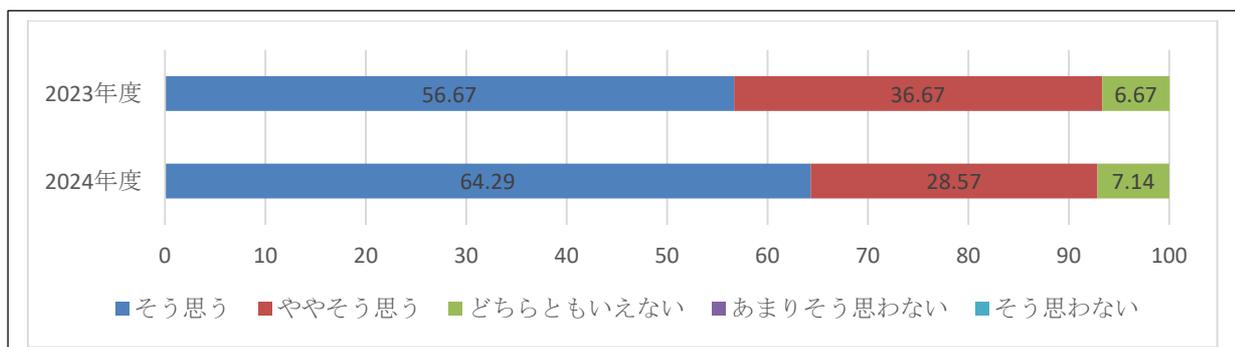
C. 子どもの多様なニーズへの対応力

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
2023年度	66.67	30.00	3.33	0.00	0.00
2024年度	64.29	28.57	7.14	0.00	0.00



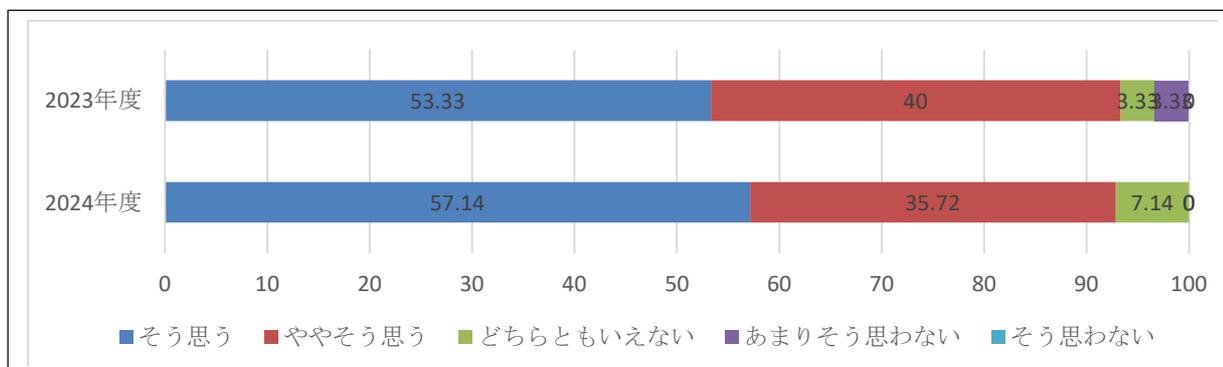
D. 協働的な問題解決を可能にする人間関係構築力

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
2023年度	56.67	36.67	6.67	0.00	0.00
2024年度	64.29	28.57	7.14	0.00	0.00



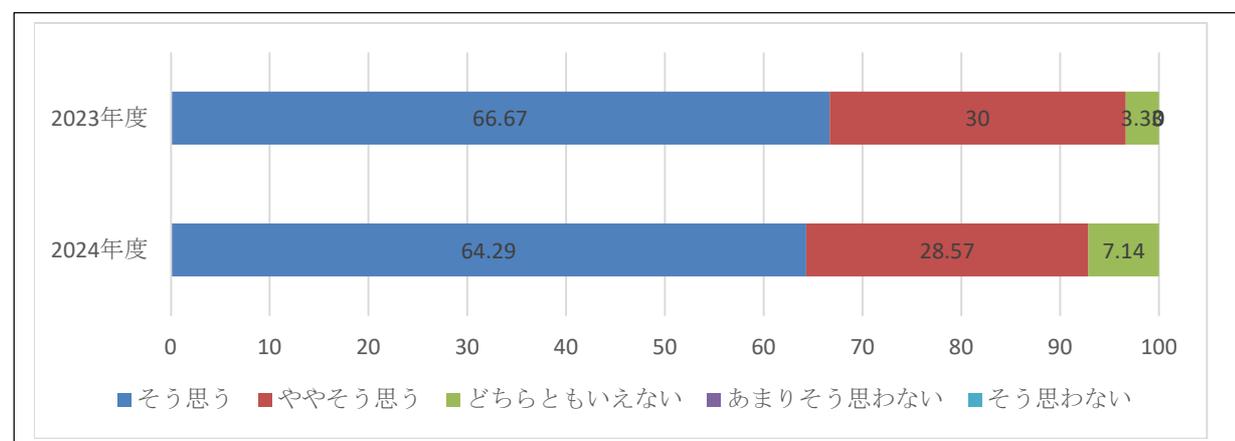
E. 既存の枠組みを超える柔軟な発想力と深い省察力

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
2023年度	53.33	40.00	3.33	3.33	0.00
2024年度	57.14	35.72	7.14	0.00	0.00



F. 社会の一員である教員として生きる意志と倫理観

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
2023年度	66.67	30.00	3.33	0.00	0.00
2024年度	64.29	28.57	7.14	0.00	0.00



☆ ディプロマ・ポリシーの達成度の分析

注意：2023年度から設問形式と選択肢が変更されているため、厳密な数値比較は困難であるが、全体的な傾向は明確に読み取れる。

「A. 教育の専門職としての学識・技能」「B. 教育現場の諸課題の背景にある関係構造に気づく視点」「C. 子どもの多様なニーズへの対応力」「D. 協働的な問題解決を可能にする人間関係構築力」「E. 既存の枠組みを超える柔軟な発想力と深い省察力」「F. 社会の一員である教員として生きる意志と倫理観」の質問項目からなる。

「A」については、2023年度は、「そう思う」(56.67%)、「ややそう思う」(40.00%)「ややそう思わない」(3.33%)から、2024年度は「そう思う」(75.00%)、「ややそう思う」(25.0%)へと上昇している。

「B」については、2023年度は、「そう思う」(63.33%)、「ややそう思う」(36.67%)から、2024年

度は「そう思う」(60.72%)、「ややそう思う」(35.71%)「どちらともいえない」(3.57%)へと移行している。

「C」については、2023年度は、「そう思う」(66.67%)、「ややそう思う」(30.0%)から、2024年度は「そう思う」(64.29%)、「ややそう思う」(28.57%)「どちらともいえない」(7.14%)へと移行している。

「D」については、2023年度は、「そう思う」(56.67%)、「ややそう思う」(36.67%)「どちらともいえない」(6.67%)から、2024年度は「そう思う」(64.29%)、「ややそう思う」(28.57%)「どちらともいえない」(7.14%)へと移行している。「どちらともいえない」が増えたが、「そう思う」「ややそう思う」の数値は上昇している。

「E」については、2023年度は、「そう思う」(53.33%)、「ややそう思う」(40.0%)「どちらともいえない」(3.33%)「あまりそう思わない」(3.33%)から、2024年度は「そう思う」(57.14%)、「ややそう思う」(35.72%)「どちらともいえない」(7.14%)へと移行している。

「F」については、2023年度は、「そう思う」(66.67%)、「ややそう思う」(30.0%)「どちらともいえない」(3.33%)から、2024年度は「そう思う」(64.29%)、「ややそう思う」(28.57%)「どちらともいえない」(7.14%)へと移行している。

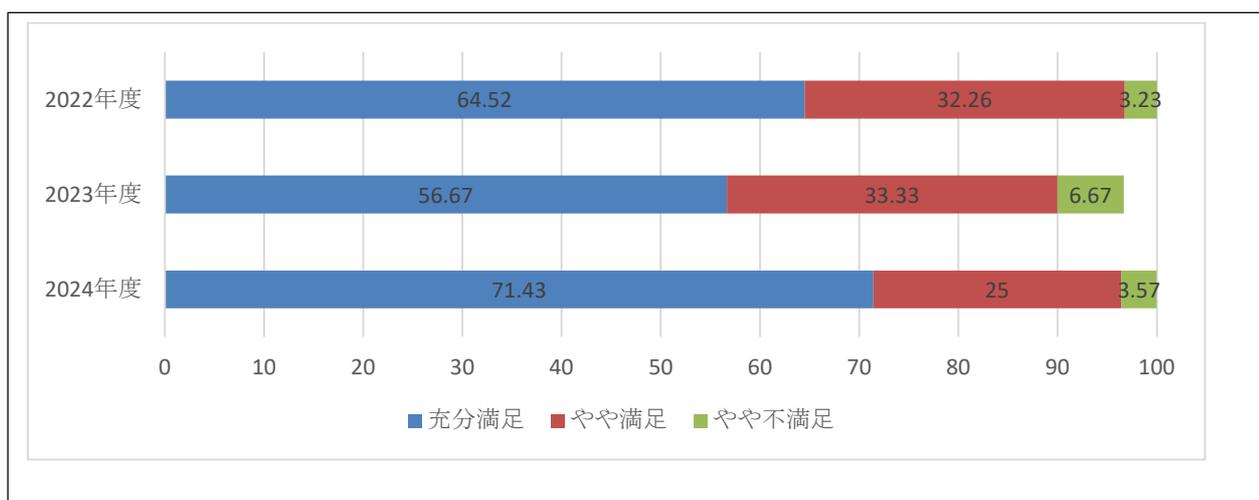
(3) 高度教職実践専攻（教職大学院）の特色や授業科目等に対する満足度

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q3 次の項目について、あなたの満足度をおたずねします。

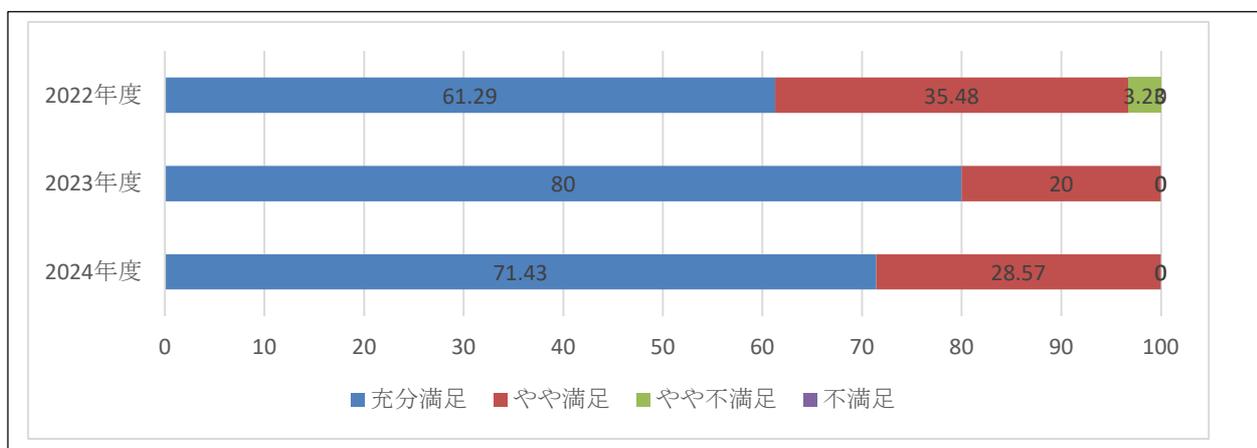
A. 学校拠点方式

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	64.52	32.26	3.23	0.00
2023年度	56.67	33.33	6.67	3.33
2024年度	71.43	25.00	3.57	0.00



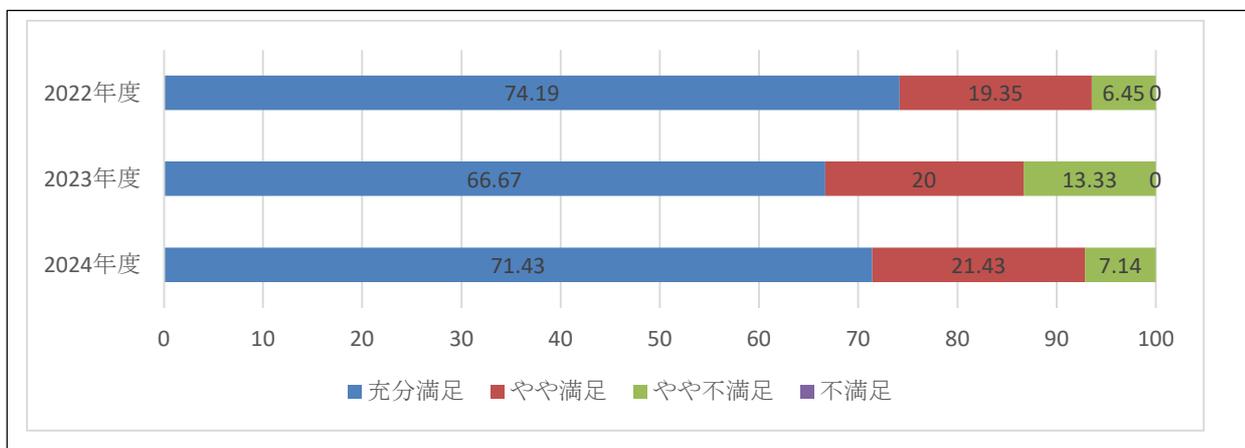
B. 専門性の異なる複数教員による指導体制

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	61.29	35.48	3.23	0.00
2023年度	80.00	20.00	0.00	0.00
2024年度	71.43	28.57	0.00	0.00



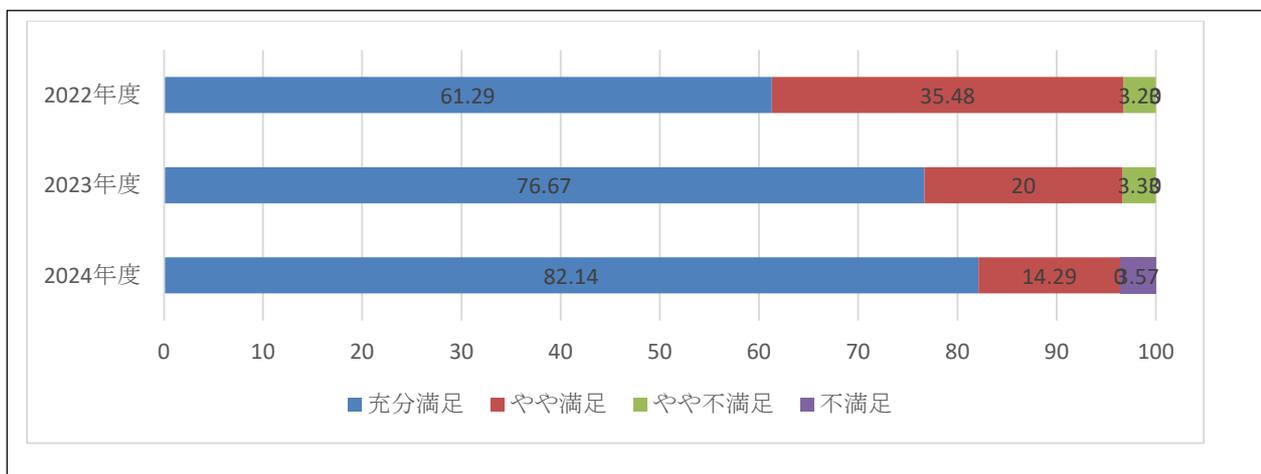
C. 様々な背景を持った院生とのチーム演習

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	74.19	19.35	6.45	0.00
2023年度	66.67	20.00	13.33	0.00
2024年度	71.43	21.43	7.14	0.00



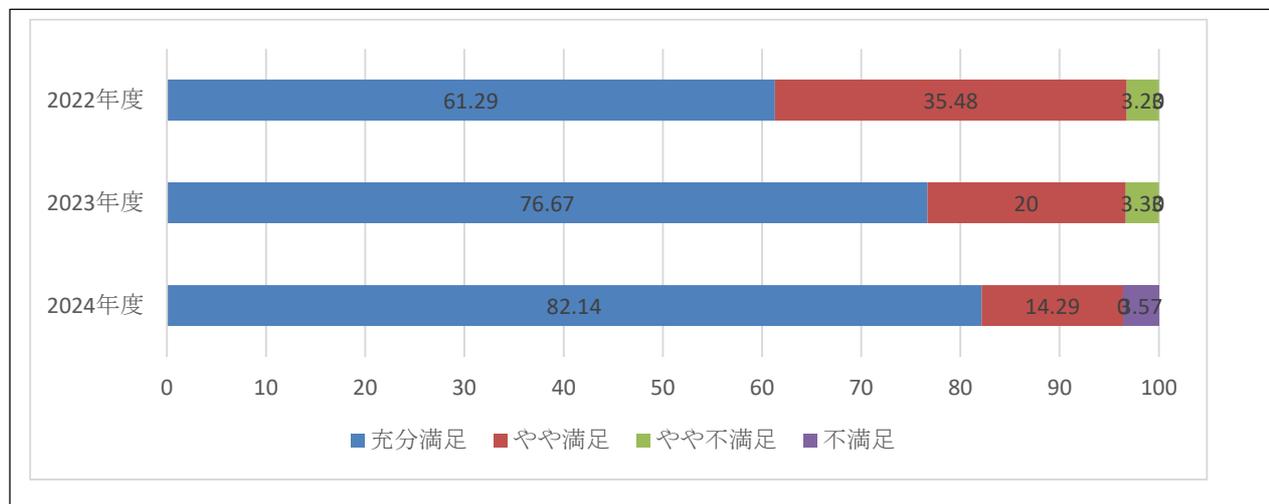
D. 履修選択プログラム制による履修制度

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	61.29	35.48	3.23	0.00
2023年度	76.67	20.00	3.33	0.00
2024年度	82.14	14.29	0.00	3.57



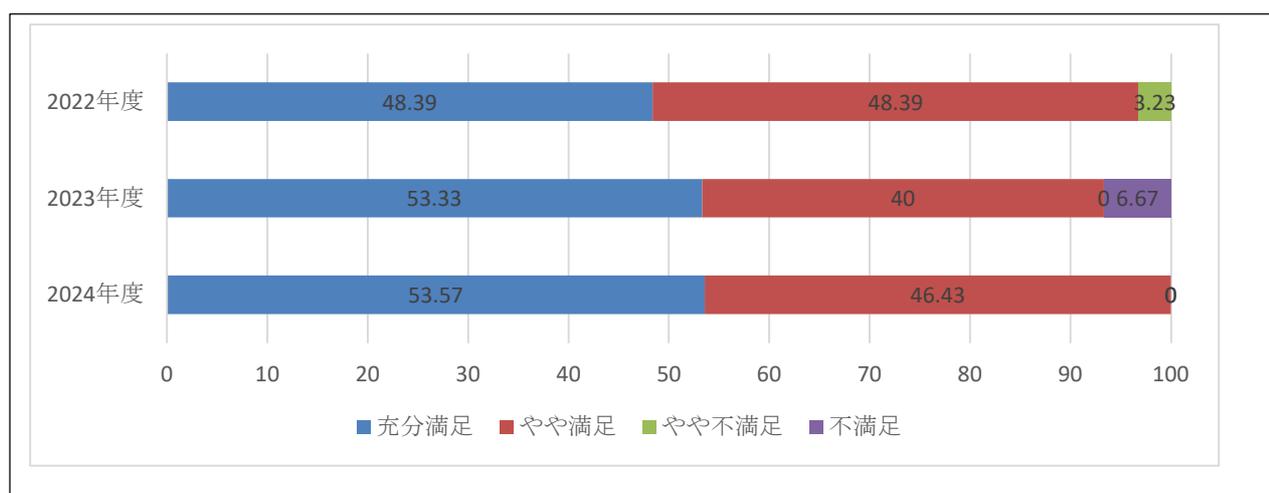
E. 集中講義（土日や長期休業期間中）の開講体制

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	48.39	48.39	3.23	0.00
2023年度	53.33	40.00	0.00	6.67
2024年度	53.57	46.43	0.00	0.00



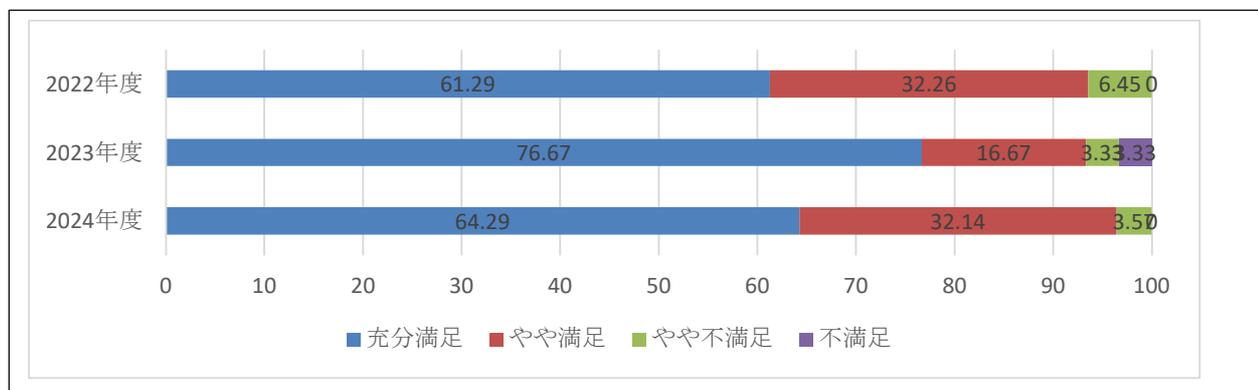
F. 必修科目（共通5領域） ※「特色ある教育課程の編成と評価」「授業研究と教育評価」「特別な教育的ニーズのある子どもの支援体制」「学級づくりと学校づくり」「未来の学校と期待される教師Ⅰ・Ⅱ」

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	74.19	25.81	0.00	0.00
2023年度	73.33	26.67	0.00	0.00
2024年度	75.00	25.00	0.00	0.00



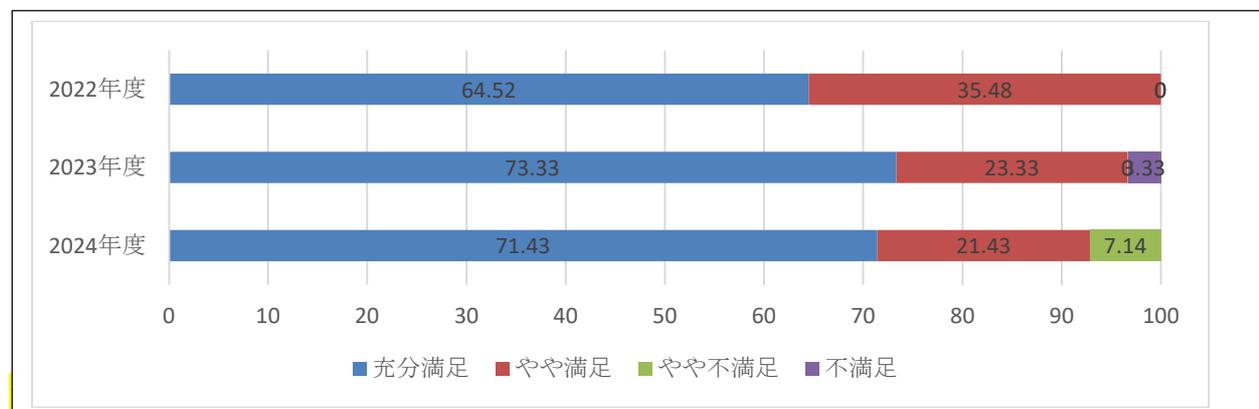
G. プログラム科目

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	61.29	32.26	6.45	0.00
2023年度	76.67	16.67	3.33	3.33
2024年度	64.29	32.14	3.57	0.00



H. 学校実習科目

	充分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2022年度	64.52	35.48	0.00	0.00
2023年度	73.33	23.33	0.00	3.33
2024年度	71.43	21.43	7.14	0.00



☆高度教職実践専攻（教職大学院）の特色や授業科目等に対する満足度の分析

「A. 学校拠点方式」「B. 専門性の異なる複数教員による指導体制」「C. 様々な背景を持った院生とのチーム演習」「D. 履修選択プログラム制による履修制度」「E. 集中講義（土日や長期休業期間中）の開講体制」「F. 必修科目（共通5領域）※「特色ある教育課程の編成と評価」「授業研究と教育評価」「特別な教育的ニーズのある子どもの支援体制」「学級づくりと学校づくり」「未来の学校と期待される教師Ⅰ・Ⅱ」「G. プログラム科目」「H. 学校実習科目」について聞いている。

「A」については、2023年度の「充分満足」（64.52%）「やや満足」（32.26%）「やや不満足」（3.23%）から、2024年度は「充分満足」（56.67%）「やや満足」（33.33%）「やや不満足」（6.67%）「不満足」（3.33%）、2024年度は、充分満足（71.43%）「やや満足」（25.00%）「やや不満足」（3.57%）へと移行している。「充分満足」「やや満足」が9割を占めている。

「B」については、2022年度は、「充分満足」(61.29%)「やや満足」(35.48%)「やや不満足」(3.23%)から、2023年度は「充分満足」(80.00%)「やや満足」(20.00%)、2024年度は、「充分満足」(71.43%)「やや満足」(28.57%)へと移行。2022年度の「やや不満足」(3.23%)を除き、すべて「充分満足」「やや満足」を得ている。

「C」については、2022年度は、「充分満足」(74.19%)、「やや満足」(19.35%)「やや不満足」(6.45%)から、2023年度は「充分満足」(66.67%)、「やや満足」(20.00%)、「やや不満足」(13.33%)、2024年度は、「充分満足」(71.43%)「やや満足」(21.43%)「やや不満足」(7.24%)である。2022年度93.54%、2023年度86.67%、2024年度92.86%と高い満足度を得ている。

「D」については、2022年度は、「充分満足」(61.29%)、「やや満足」(35.48%)「やや不満足」(3.23%)から、2023年度は「充分満足」(76.67%)、「やや満足」(20.00%)、「やや不満足」(3.33%)、2024年度は、「充分満足」(82.14%)「やや満足」(14.29%)である。「充分満足」「やや満足」で、2022年度は96.77%、2023年度96.67%、2024年度96.43%を占める。

「E」については、2022年度は、「充分満足」(48.39%)「やや満足」(48.39%)「やや不満足」(3.23%)、2023年度は「充分満足」(53.33%)「やや満足」(40.00%)「不満足」(6.67%)、2024年度は、「充分満足」(53.57%)「やや満足」(46.43%)へと変化した。「満足」の点から見ると、2022年度は96.78%、2023年度は93.33%、2024年度は100%を占めている。

「F」については、2022年度は、「充分満足」(74.19%)「やや満足」(25.81%)から、2023年度は「充分満足」(73.33%)、「やや満足」(26.67%)、2024年度は、「充分満足」(75.00%)「やや満足」(25.00%)へと変化した。すべての年度で、「充分満足」が70%以上、「満足」が25%以上を占めている。

「G」については、2022年度は、「充分満足」(61.29%)「やや満足」(32.26%)「やや不満足」(6.45%)から、2023年度は「充分満足」(76.67%)「やや満足」(16.67%)「やや不満足」(3.33%)「不満足」(3.33%)、2024年度は、「充分満足」(64.29%)「やや満足」(32.14%)「やや不満足」(3.57%)である。2022年度93.55%、2023年度93.34%、2024年度96.43と96.43%と90%以上を維持している。

「H」については、2022年度は、「充分満足」(64.52%)「やや満足」(35.48%)から、2023年度は「充分満足」(73.33%)「やや満足」(23.33%)、2024年度は、「充分満足」(71.43%)「やや満足」(21.43%)「やや不満足」(7.14%)である。2024年度の「やや不満足」(7.14%)以外は、「充分満足」「やや満足」をキープしている。

(4) 面接練習、各種相談への満足度

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q4 大学院院入学後に、次のものを使用・実施しましたか

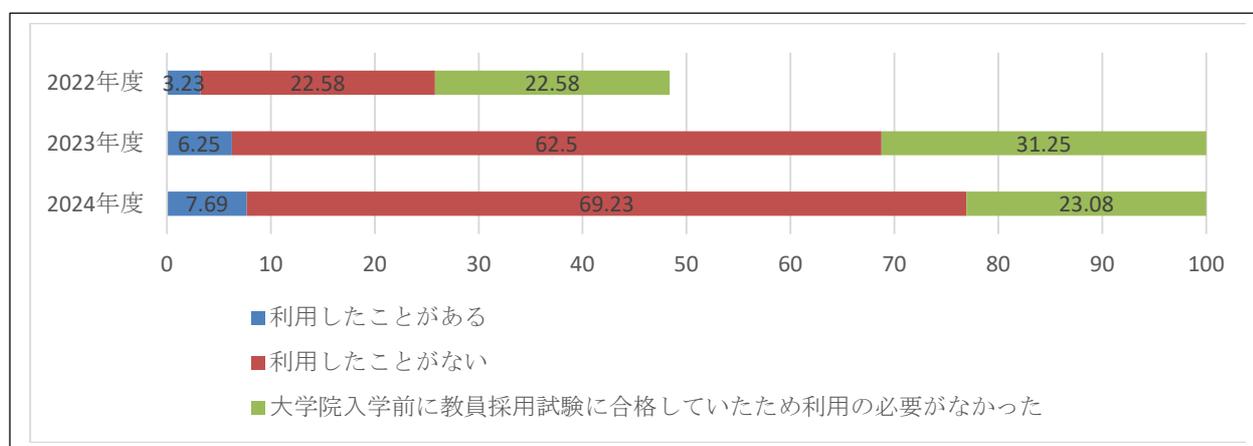
※2021年度新設

※2022年度までは、学部卒院生または現職教員院生のみ回答のため、100%になりません。

<学部卒院生のみ回答>（A～D）

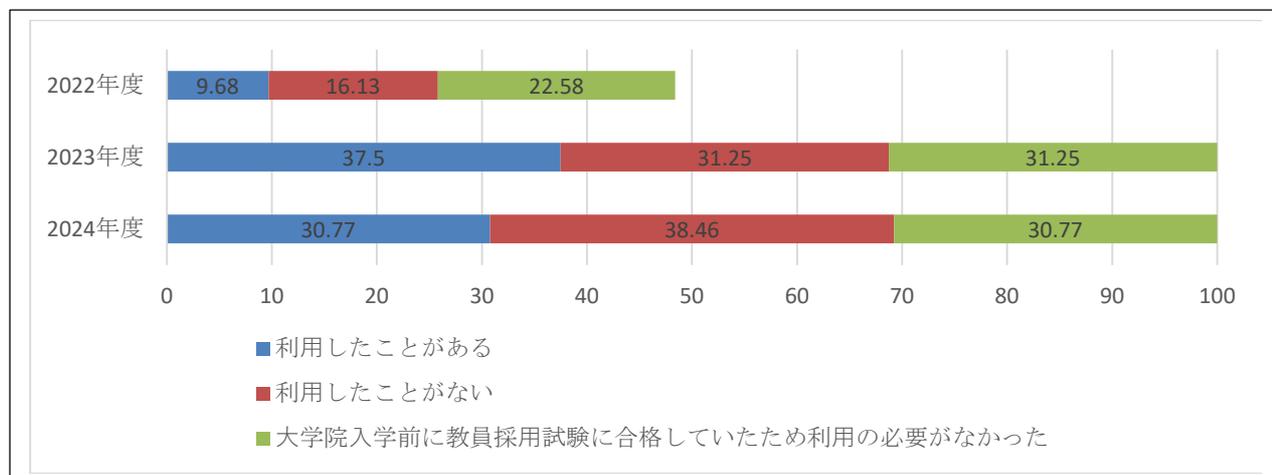
A. 就職相談室（中校舎1階）

	利用したことがある	利用したことがない	大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった
2022年度	3.23	22.58	22.58
2023年度	6.25	62.50	31.25
2024年度	7.69	69.23	23.08



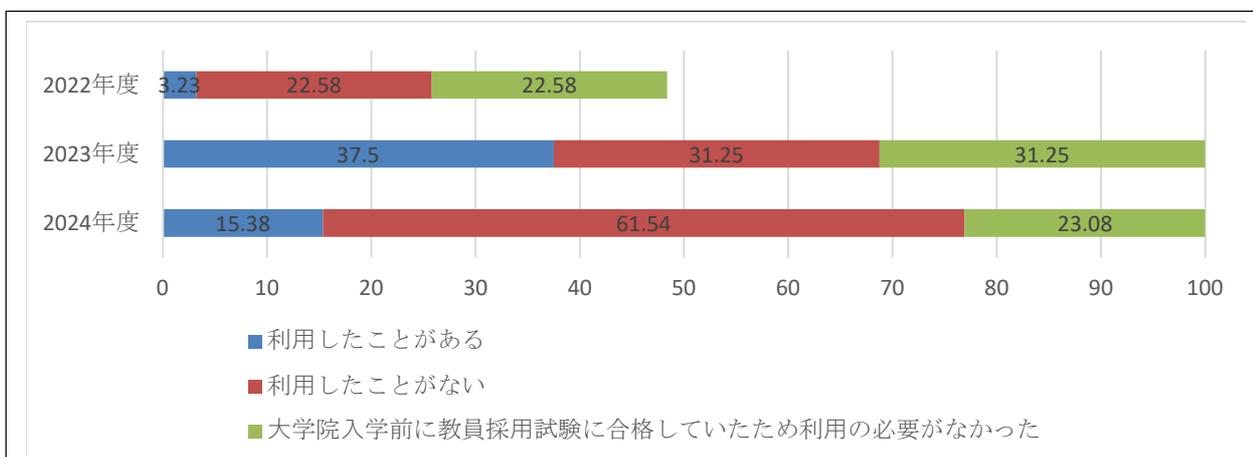
B. 教員採用試験に向けて大学が実施している面接練習

	利用したことがある	利用したことがない	大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった
2022年度	9.68	16.13	22.58
2023年度	37.50	31.25	31.25
2024年度	30.77	38.46	30.77



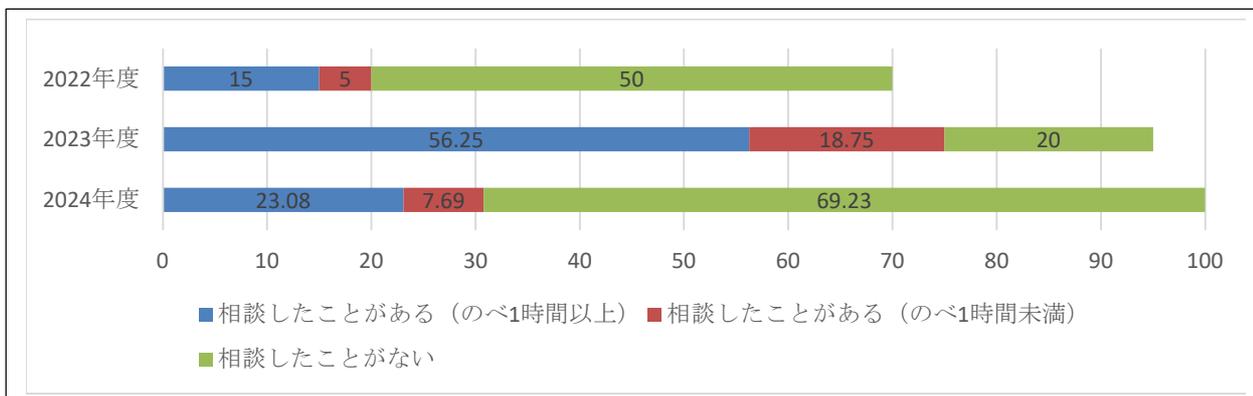
C. 担当教員や現職教員院生等による面接練習

	利用したことがある	利用したことがない	大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった
2022年度	3.23	22.58	22.58
2023年度	37.50	31.25	31.25
2024年度	15.38	61.54	23.08



D. 担当教員等による修了後のキャリアに関する相談

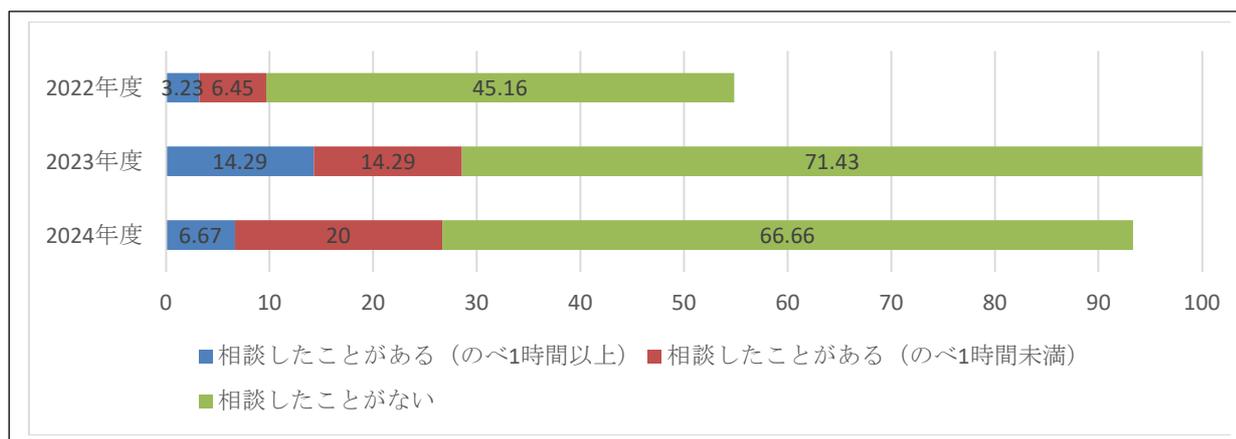
	相談したことがある (のべ1時間以上)	相談したことがある (のべ1時間未満)	相談したことがない
2022年度	15.00	5.00	50.00
2023年度	56.25	18.75	20.00
2024年度	23.08	7.69	69.23



＜現職教員院生のみ回答＞（E）

E. 担当教員等による修了後のキャリアに関する相談

	相談したことがある (のべ1時間以上)	相談したことがある (のべ1時間未満)	相談したことがない
2022年度	3.23	6.45	45.16
2023年度	14.29	14.29	71.43
2024年度	6.67	20.00	66.66



☆ 面接練習、各種相談への満足度の分析

「学部卒院生」が回答した「A. 就職相談室」「B. 教員採用試験に向けて大学が実施している面接練習」「C. 担当教員や現職教員院生等による面接練習」「D. 担当教員等による修了後のキャリアに関する相談」である。

「A」については、2022年度は、「利用したことがある」(3.23%)、「利用したことがない」(22.58%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(22.58%)から、2023年度は「利用したことがある」(6.25%)、「利用したことがない」(62.50%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(31.25%)、2024年度は、「充分満足」(7.69%)「やや満足」(69.23%)「やや不満足」(23.08%)である。

「B」については、2022年度は、「利用したことがある」(9.68%)、「利用したことがない」(16.13%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(22.58%)から、2023年度は「利用したことがある」(37.50%)、「利用したことがない」(31.25%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(31.25%)、2024年度は、「利用したことがある」(30.77%)、「利用したことがない」(38.46%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(30.77%)である。

「C」については、2022年度は、「利用したことがある」(3.23%)、「利用したことがない」(22.58%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(22.58%)から、2023年度は「利用したことがある」(37.50%)、「利用したことがない」(31.25%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(31.25%)、2024年度は、「利用したことがある」(15.38%)、「利用したことがない」(61.54%)「大学院入学前に教員採用試験に合格していたため利用の必要がなかった」(23.08%)である。

「D」については、2022年度は、「相談したことがある (のべ1時間以上)」(15.00%)、「相談したことがある (のべ1時間未満)」(5.00%)「相談したことがない」(50.00%)から、2023年度は「相談し

たことがある（のべ1時間以上）」（56.25%）、「相談したことがある（のべ1時間未満）」（18.75%）、「相談したことがない」（20.00%）、2024年度は、「相談したことがある（のべ1時間以上）」（23.08%）、「相談したことがある（のべ1時間未満）」（7.69%）、「相談したことがない」（69.23%）である。

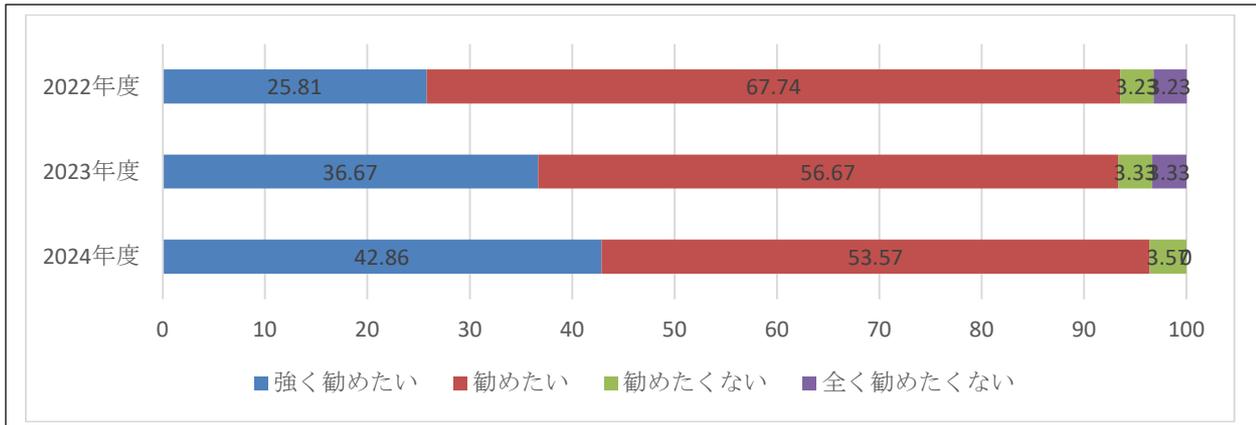
「現職教員院生」のみが回答した「E. 担当教員等による修了後のキャリアに関する相談」については、2022年度は、「相談したことがある（のべ1時間以上）」（3.23%）、「相談したことがある（のべ1時間未満）」（6.45%）「相談したことがない」（45.16%）から、2023年度は「相談したことがある（のべ1時間以上）」（14.29%）、「相談したことがある（のべ1時間未満）」（14.29%）「相談したことがない」（71.43%）、2024年度は、「相談したことがある（のべ1時間以上）」（6.67%）、「相談したことがある（のべ1時間未満）」（20.00%）「相談したことがない」（66.66%）キャリアへの相談は、2022年度9.68%、2023年度28.58%、2024年度26.67%と上昇傾向にある。

(5) 教職大学院への進学を推奨する意思の有無

■年度別比較グラフ（2022～2024年度）（単位はすべて%）

Q6 教職大学院への進学を周りの人（後輩や同僚など）に勧めたいですか。

	強く勧めたい	勧めたい	勧めたくない	全く勧めたくない
2022年度	25.81	67.74	3.23	3.23
2023年度	36.67	56.67	3.33	3.33
2024年度	42.86	53.57	3.57	0.00



☆教職大学院への進学を推奨する意思の有無の分析

2022年度から徐々に教職大学院を推奨する意思が上昇している。2022年度は、「強く勧めたい」（25.81%）、「勧めたい」（67.74%）、2023年度は「強く勧めたい」（36.67%）、「勧めたい」（56.67%）、2024年度は、「強く勧めたい」（42.86%）、「勧めたい」（53.57%）へと数値が上昇している。それに伴い、2022年度から「勧めたくない」（3.23%）「全く勧めたくない」（3.23%）、2023年度、「勧めたくない」（3.33%）「全く勧めたくない」（3.33%）、2024年度は、「勧めたくない」（3.57%）へと減少している。